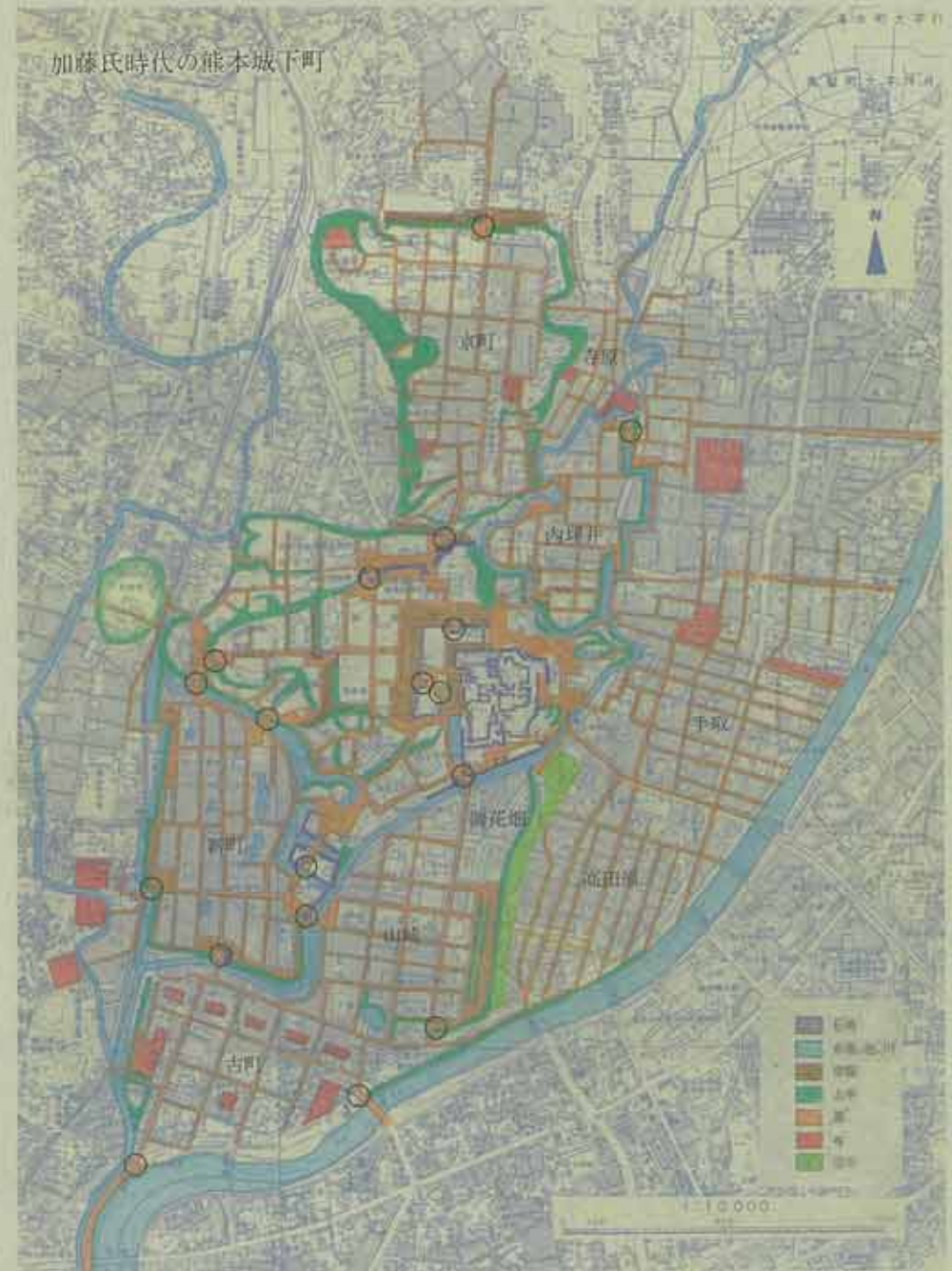


歴史廻廊都市 熊本

——フィールドミュージアム熊本城下町の提案



——熊本城周辺シンボルネットワーク、シンボルスポット整備計画 / 熊本市

ごあいさつ



本市はこれまで「ヒューマンシティ熊本」を目指し、魅力ある都市環境の形成に努めてまいりました。

なかでも都市景観につきましては、昭和63年に熊本市都市景観基本計画を策定し、公共空間の景観整備をはじめとして、熊本の個性を生かした都市づくりを進めております。

水と緑に恵まれた本市は、加藤清正公による城下町の形成、それに続く細川氏の時代に熟成された伝統文化、更には明治以降の近代都市の建設という先人が築いた素晴らしい資産を受け継いでいます。

永い歴史の上に成り立つ本市は、これからの都市づくりのなかにこれらの資源を活かし、趣きのある個性的な都市づくりを進めていかねばなりません。

本報告書はこのような観点で、本市の特に旧城下町地域を主な対象として、様々な歴史的資源をあきらかにし、それを現代の都市づくりに活用する手法を探っております。

この報告書をもとにして、私達の熊本がこれまで以上に豊かな歴史性、文化性を感じることができる都市へと発展することを願っております。

平成元年 3月

熊本市長 田 尻 靖 幹

歴史廻廊都市

くまもと

ーフィールドミュージアム熊本城下町の提案ー

目次

第1章	熊本城下町の概要	
1-1	城下町の歴史-----	2
1-2	城下町の史料-----	7
1-3	城下町の構造-----	14
第2章	景観整備の基本方針	
2-1	都市における景観整備の方向-----	18
2-2	熊本市の景観整備-----	18
2-3	フィールドミュージアムへの歴史と概念-----	19
2-4	フィールドミュージアム化の手法-----	21
2-5	デザイン言語の抽出-----	22
2-6	フィールドミュージアムと観光-----	22
2-7	都市景観の共有概念-----	23
第3章	フィールドミュージアム の基礎調査	
3-1	調査の概要-----	24
3-2	地区の歴史と現況-----	26
3-3	調査のまとめと整備の方向-----	64
第4章	フィールドミュージアム 熊本城下町整備計画	
4-1	全体計画-----	66
4-2	地区別整備計画-----	82
4-3	実現に向けての提案-----	97
4-4	整備例-----	103
付録	略年表-----	118

第1章 熊本城下町の概要

1-1 城下町の歴史

中世の茶臼山一帯 熊本城が選地された茶臼山一帯は古代の官道（現在の国道にあたる）の変化によって重要性を増した。古代の官道は平安時代に肥後の国の役所である国府が託麻（出水町国府）から飽田（二本木）に移ると、江田～高原～蚕養～託麻国府のルートから京町台地～茶臼山の西（藤崎台球場の西）～一駄橋～飽田国府のルートへと変化した。茶臼山には承平5年(935)平将門の乱鎮圧のため藤崎八幡宮が勧請され、その後寺院も建立されて信仰の場となっていた。

この一帯は国府に近い要衝であるため南北朝の内乱期にはしばしば軍営に利用され、茶臼山には「隈本城」が築かれ攻防の場となった。南北朝の古文書には「隈本御陣」「藤崎御陣」「隈本之城」などが見え、おおよそ茶臼山から藤崎台のあたりをさしているといえるが、位置を特定することは困難であり、あるいは戦時に仮設された城砦だったのかもしれない。

千葉城
(出田秀信)
(鹿子木親員)
(菊池義武)
古城への移転
(城親冬)

伝承では、熊本城の創始は出田氏の千葉城とするのが一般的である。文明17年(1485)出田秀信が戦死したあと鹿子木親員(寂心)が入城した。彼は熊本の城に40年いたがこの間に千葉城から古城のあたりに移った。当時隈本には肥後の守護菊池義武が館をかまえており老臣鹿子木親員は任務を補佐した。天文18年(1549)鹿子木親員が死んだあと、菊池義武は大友氏に攻められて島原に亡命し鹿子木氏は城を失った。

この後、隈本城には城親冬が入城して、鹿子木氏の所領を受け継ぎ五代続いた。天正3年(1575)島津家久の「上京日記」には、「朝宿をたつて城氏の城を一見して鹿子木という町にむかった」としている。城氏の城下町について、寺本直康は「古今肥後見聞雑記」において「古城の城は鹿子木参河入道寂心が築かれたという、その後城越前守が移り住んだ。熊本町の市日のはじまりは、城越前守が古城にいたころ、なにか子供の慰めになる珍しい事はないかと新町の者たちへ命じ、友枝氏らの先祖が

肥後国府への駅路



木下良氏「肥後国」(『古代日本の交通路IV』所収)

新一丁目に『市』を立てて慰めをしたという、そのとき池上村からは木製の獅子頭やきじを出したが、きじなどは今でも昔のとおりだという。熊本の『市』はこうしてはじまった。」と記している。

豊臣秀吉の

九州征伐

天正15年(1587)4月豊臣秀吉は九州征伐の途上隈本城に入ったが、この時の記録である「九州御動座記」はそのときの隈本城を「ここは肥後の府中である、城十郎太郎が縄張り数年かかってこしらえた名城である。家臣を5,000人ばかりも持つ大将で、島津氏が一方のかためを頼むほどの侍であったが、秀吉の御動座について、なんの支障もなく、居城のまま降参し、味方についたものだ、ここに中一日御休息した。」と記している。隈本城は名城として高く評価されており侍5,000人を抱えていたというから当然城下町も栄えていたであろう。秀吉は九州の中心にある肥後を重視し「肥後はしかるべき国にて候、羽柴陸奥守(佐々成政)置かせられ候、隈本名城に候間、居城として御普請おおせつけられ候」と佐々成政に肥後国を与え隈本城主に任じたのであった。しかし、成政は検地を強行して肥後の国衆(地方の有力な侍)の反乱に遭い、その責任をとらされて自刃した。

(佐々成政)

加藤清正・

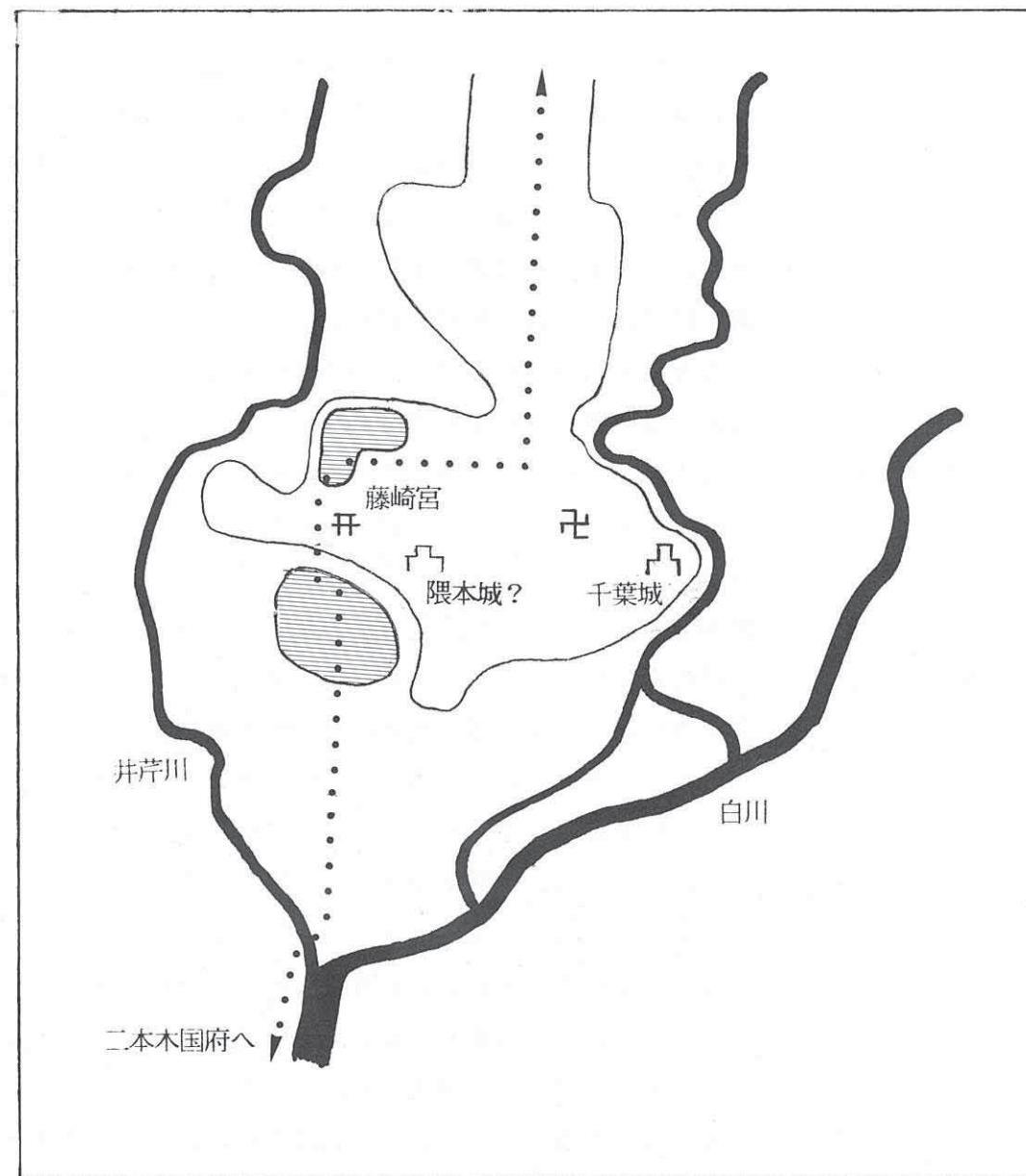
隈本城入城

天正16年6月隈本城は加藤清正に与えられた。清正の所領は城北四郡と芦北の194,916石であった。3,000石の侍大将からの大抜擢である。直臣を170人程度しか持たなかった清正は19万石に見合う2~3,000人の家臣団を構成する必要があった。国衆の生き残り、佐々の遺臣、出身地尾張をはじめ各地の浪人を召し抱えた。これら家臣団は城下町居住を原則としたから、大規模な城郭と城下町の形成が急務であった。

熊本城築城

加藤清正は隈本城に入った。その後清正による隈本城(古城)築城がなされ慶長12年熊本新城が築城された。熊本城築城には諸説があるが、史料的におさえられるところでは、天正18年(1590)普請に着手、朝鮮出兵中も工事が続けられ、慶長5年(1600)頃一応の完成、その後も作事は進められ、慶長12年頃一応の完成をみた。この場合、古城の段階と新城の段階があり、慶長12年に完成した新城は熊本城と改称するに至った。

清正入城以前の城下の様子



町

熊本城の築城に関連して城内に総構え、侍町が形成されたが、城郭の外にも武家町が配置され、町人町がつくられた。

城下町の拡大整備

熊本城下町は、熊本城築城と関連して拡大整備されたと思われる。すでに城氏時代に新町付近には町が形成されていたが、天正19年の古町の「細工町地割図」によれば、当時細工町にいた住民が末町に移され、あとに「大阪屋」「堺屋」「天満屋」などの商人が割り当てられている。清正によって古町界隈の町割りがなされたのである。同様に、新町・京町・坪井の町人町が侍町を取りまく形で形成された。

加藤清正の城下町構想は半国領地時の段階（第一期）と一国領地時の段階（第二期）の段階が考えられる。

第一期城下町

まず第一期では家臣数は2～3,000人程度であるから城下町の規模はそれほど大きなものではなかったと思われる。上級家臣は城内に置かれ下級の者も城からさほど離れていないところ（たとえば漆畑・京町台の西側・龍迫谷など）に配置している。

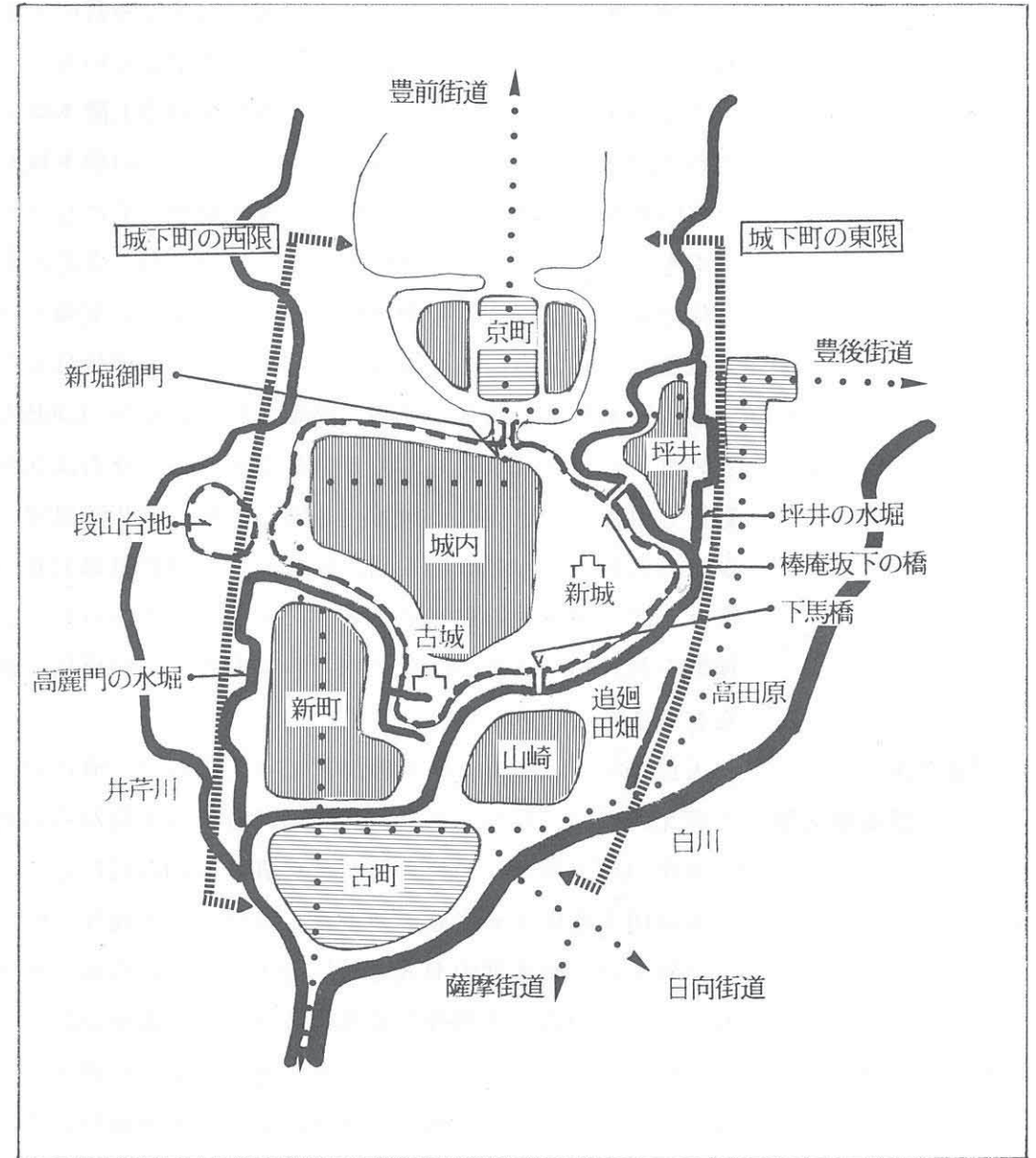
（城下町の東限）

「熊本屋敷割之図」によって初期の城下町を復原してみると、東は坪井の水堀から追廻田畑の低地を結ぶ線が城下町の東限となっている様子がわかる。坪井の水堀はもと坪井川の河床と思われ、清正はここを水堀として外堀の役目をもたせ、京町台の崖下に坪井川を引き廻したらしい。発掘調査の結果では崖下の坪井川は新しく掘削されたものと想定されることから熊本城の南崖下ばかりでなく、東側も坪井川を茶臼山に引き寄せ城郭と城下町を坪井川の流れて区画したといえよう。追廻田畑は坪井川の自然流路でその後も山崎と高田原一帯を隔絶する低地を形成し、洪水の際には水路として機能していた。

（城下町の西限）

城下町の西側は段山台地から高麗門の水堀が城下町の西限となった。井芹川を外堀に見立てて、高麗門の水堀を内堀として、新町・古町の商家を配置している。北側の京町にも商家を配しているので、初期の武家屋敷は城内と山崎・坪井・京町の一部に限られる。城内からは下馬橋・棒庵坂下の橋・新堀御門ですぐに連絡できる地域に武家屋敷が置かれて

第一期の城下の様子



町人町
侍町

第二期城下町

いる。商家の町はこれら武家屋敷町の外側の街道沿いに配置された。町人町のうちもっとも早く形成されたのは古町・新町と豊前街道沿いに来た京町であろう。

「肥後国史」によると坪井町の成立は慶長年間のこと、この町はもともと坪井村の田畑であったが、慶長4年(1599)清正は居村を竹辺村に移し、市店を立て、城下に編入、諸所から商人が往来して忠広の時に町を形成したと想定される。

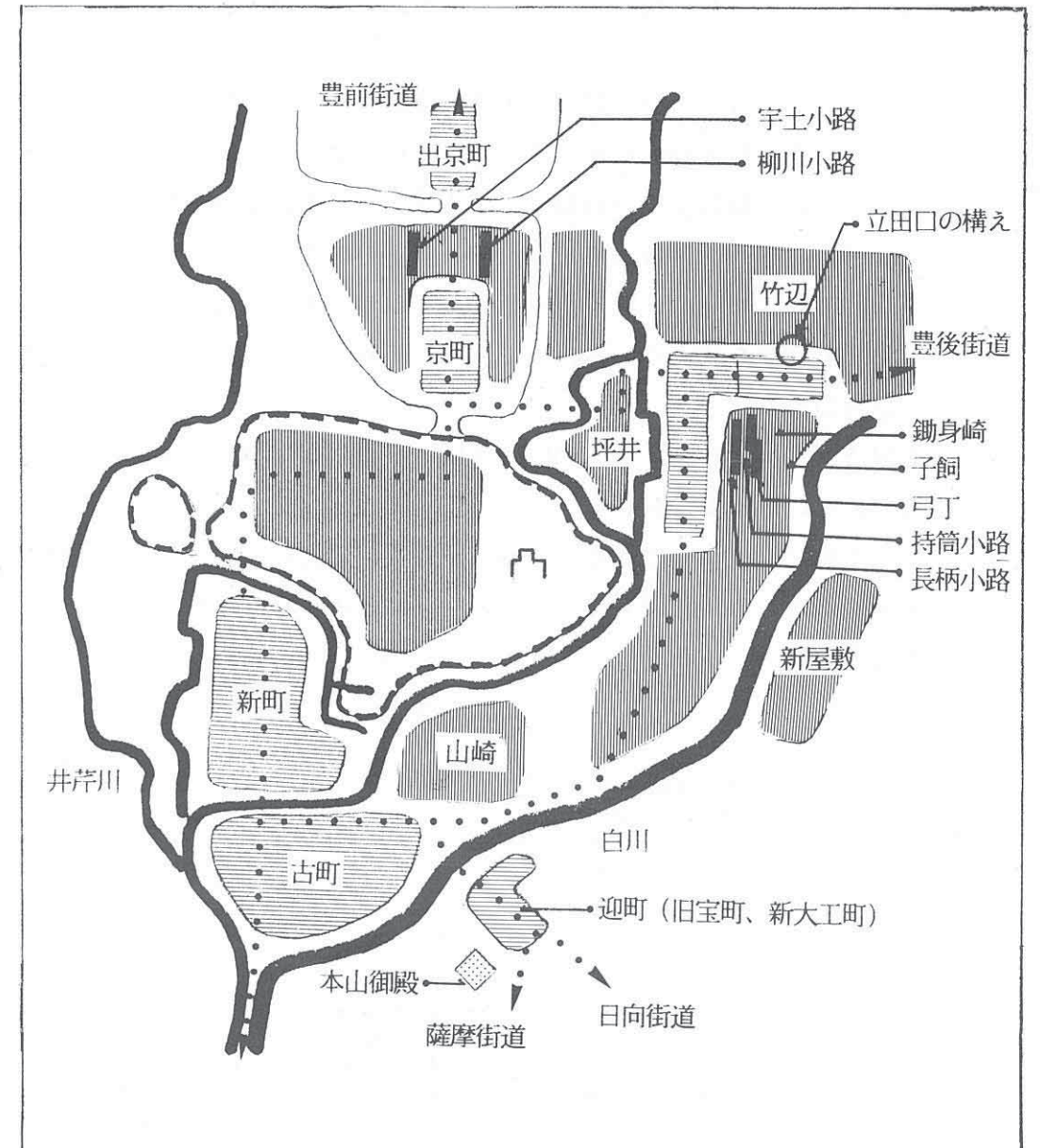
清正の肥後一国領有によって家臣も倍増した。その結果、武家屋敷が狭隘となり城下町の拡張がなされた。これが第二期の城下町の始まりである。京町では京町1~2丁目の町人町に宇土小路(関ヶ原役で滅亡した小西行長の遺臣を召し抱え屋敷を置く)・柳川小路(同じく立花宗茂の旧臣を置く)が設置され、寛永年間までに構口の外に出京町の町人町が形成されて城下町域が拡張された。

細川氏の時代にも加藤氏の城下町構想はそのまま踏襲されたため熊本城下町はほとんど変化が見られないが、一部武家屋敷の不足を補うため町家の移動がなされた。薩摩街道筋では寛永20年(1643)宝町・新大工町を長六橋の先に移して、跡地を武家屋敷にあてた。また豊後街道筋では寛永13~15年に本坪井の田地を開発して、長柄小路・持筒小路・弓丁を造成し、同じ頃竹辺村のうちに米田監物・長岡勘解由の下屋敷を造成するなど、城下町の拡大がみられた。豊後街道の立田口の構えは府内と府外を画するものであったが、明暦年間(1655~58)には鋤身崎から子飼のあたりまで武家屋敷が広がっており、ここまで府内に編入されるに至った。

江戸中期以降は、文政2年(1819)本山御殿の造築、文久元年(1861)新屋敷町が造成され、熊本城下町は白川東岸へも拡大して行くことになる。

明治から現在に至るまで、戦争・災害あるいは人為的な都市計画等、町を改変させる事象がおこり、町の様相が変わったが、町の骨組となる構造は現在でも残っている。

第二期の城下の様子



町人町
侍町

考察：熊本城下町の規模

「熊本府の絵図 (No.22)・江戸中期ごろ」(県立図書館蔵)をもとに町人町・侍町・社寺地の3区分で土地の面積を計測すると、表1の内訳になる。

町人町があったのは、新町・古町・坪井・京町・迎町に限られており、これらの合計約90haのなかに約2万人が住んでいたと思われる。

それぞれの概数は「肥州録」によると、およそ表2のとおり(人数は文化8年)で、総町数は86丁(19,050人)である。

侍町の約340haには熊本城も含まれており、また屋敷や長屋など形式の異なる住宅を含んでいるために、同じ侍町の中でも居住密度には相当の開きがある。

城下町全体として、約460haの区域のなかに約4万人が居住していたのではないかと推定される。人口密度を現在と比較すると表3(数字はすべて概数)のようになる。なお江戸時代の町人の人口は、「熊本町方記録」によると、明和5年(1768)の21,630人をピークとして1.8～1.9万人で推移している。

表1

侍町	約 340 ヘクタール
町人町	約 90 ヘクタール
社寺地	約 30 ヘクタール
合計	約 460 ヘクタール

表3

		土地面積 (ha)	人口 (万人)	密度 (人/ha)
江戸時代	城下町全体	460	4	90
	[町人町]	90	2	220
明治22年 市政施行時	行政区域	601	4.3	70
昭和55年	行政区域	17,172	52.56	30
	[D I D]	6,280	42.56	70

表2

	★懸	人数	丁町名
新	新町1丁目	547人	1丁日本通
	2丁目	796人	2丁日本通・魚屋町・馬借町・段山町・桶屋町・檜物屋町
	3丁目	762人	3丁日本通・塩屋町・烏屋町・瓶屋町
町	蔚山町	429人	1丁
	職人町	548人	上職人町・中職人町・下職人町
	細工町	1481人	細工1丁目・2丁目・3丁目・4丁目・石塘町・新細工町・高麗門町
古	西古町	1985人	呉服1丁目・2丁目・3丁目・西阿弥陀寺町・桶屋町・川端町・西唐人町・中阿弥陀寺町・中唐人町・鍛冶屋町・長者町
	中古町	1726人	米屋1丁目・2丁目・3丁目・万1丁目・2丁目・大工町・板屋町・魚屋2丁目・3丁目・小沢町・通町
	東古町	2847人	船場1丁目・2丁目・3丁目・魚屋1丁目・新鍛冶屋町・古川町・新古川町・新大江町・宝町・山崎町
町	紺屋町	1559人	紺屋1丁目・2丁目・3丁目・同横町・同阿弥陀寺町・同今町・新今町
坪井	本坪井町	1591人	1丁目・3丁目・魚屋町・新町・横町・秋雲院町
	新坪井町	2744人	六間町・烏町・八百屋町・米屋町・魚屋町・職人町・2丁目・堀端町・鍛冶屋町・紺屋町・寺原町・馬借町
京町	京町	1001人	京町1丁目・2丁目・今京町・金峰山町
	出京町	1036人	3丁あり

★懸かかり——町の単位

1 - 2 城下町の史料

[絵図]

名称：熊本屋敷割之図

年代：寛永 8、9 年 (1631.2)

所蔵：熊本県立図書館 (19-368)

この絵図の年代は中に描かれている人名から寛永 8、9 年の加藤忠広時代末期（寛永 9 年に加藤家は改易となる）と推定されるもので、熊本城とその城下町の形成と発展を知る上で貴重な史料である。加えて細川入国時に家臣の屋敷割に利用していることも興味深い。この絵図により、ほぼ加藤時代に現在の熊本市旧市街の基本構造が形成されていたことが理解できる。

また、この絵図により加藤時代と細川時代との比較ができ、細川氏入国後の城下町の改造が明確となった。

その他新たに判明したことは以下の通りである。

- ①加藤氏時代の家臣団の配置が明確となった。
- ②新町にある池は文献には表われていたが、初めてその存在が確認できた。
- ③現在では消え去った「古坪井」等の地名が発見された。
- ④京町口の外の堀は加藤氏時代にすでに出来あがり、文献にあった細川氏時代の工事は改造であった
- ⑤立田口の配置が明らかになったが、熊本城の鬼門の位置にある巨大な寺院は今でも謎である。



名称：熊本府の絵図

年代：江戸幕末

所蔵：熊本県立図書館 (3-022)

この絵図の年代は安巳橋がすでに架けられていることから、安政4年(1857)以降、幕末と想定される。

絵図の特徴は侍町と町人町の色分けだけでなく、侍町も地区別に色分けされていることで、全国的にも珍しいものである。

また加藤氏時代の絵図と比べると、人口の増加に伴い城下町が拡張されているが、これは細川氏入国後特に侍屋敷の不足によるものである。

竹部(竹辺)は寛永13~15年(1636~8)以降坪井村の中に拡がって一夜塘のあたりまで拡大されている。

迎町は寛永20年(1643)に、川向こうの通り丁の職人町を移してきて宝町、新大工町、紺屋新今町の3町を開いたものである。

新出町は寛政元年(1789)に出京町の北に拡がったものである。

この頃には城下町も整備され、数回の大火の後都市計画されて拡張された火除地である草葉、浄行寺、坪井の広丁も明確に表われている。



名称：白川県肥後国熊本全図

年代：明治5～8年（1872～4）

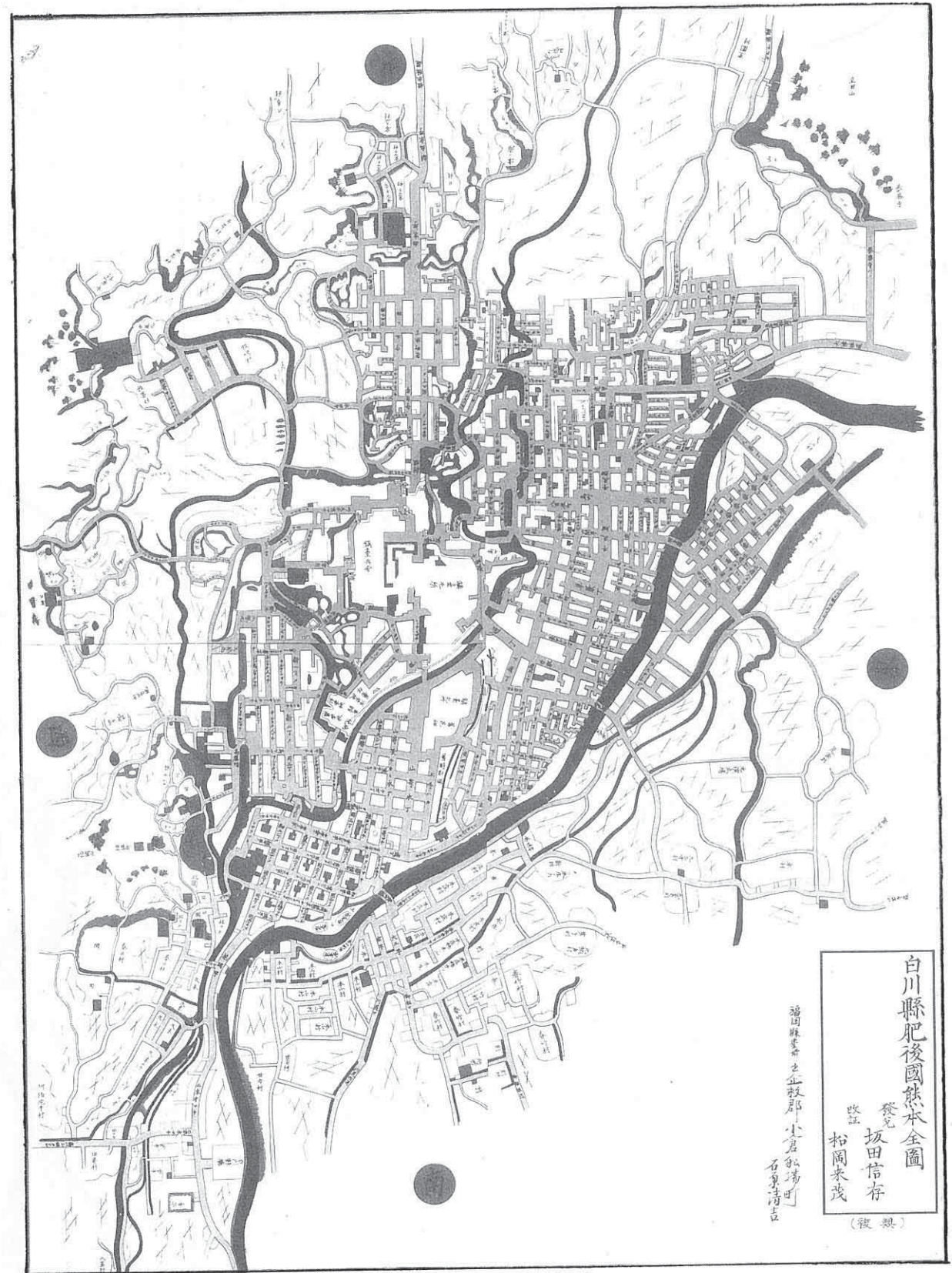
所蔵：熊本県立図書館（チM05A001）

この地図の年代は、古城に熊本洋学校と古城医学校（明治4～9）が存在し、また白川県庁が二本木（明治5～8）に存在することから明治5～8年と想定される。

花畑邸は、北側が鎮台本所となっており、花畑の南、旧坪井川河川敷は旧藩時代は馬立て・射的場であったが旧騎射場とその名をとどめている。

明治9年の神風連、翌年の西南の役で城下町が灰燼に帰す前の町割がよくうかがえる。

またこの地図には現在は一部にしか使われていない旧藩時代の坂名、通り名が全て記入されているということも特徴の一つである。



名称：熊本全図

年代：明治13年（1880）

所蔵：石井清喜

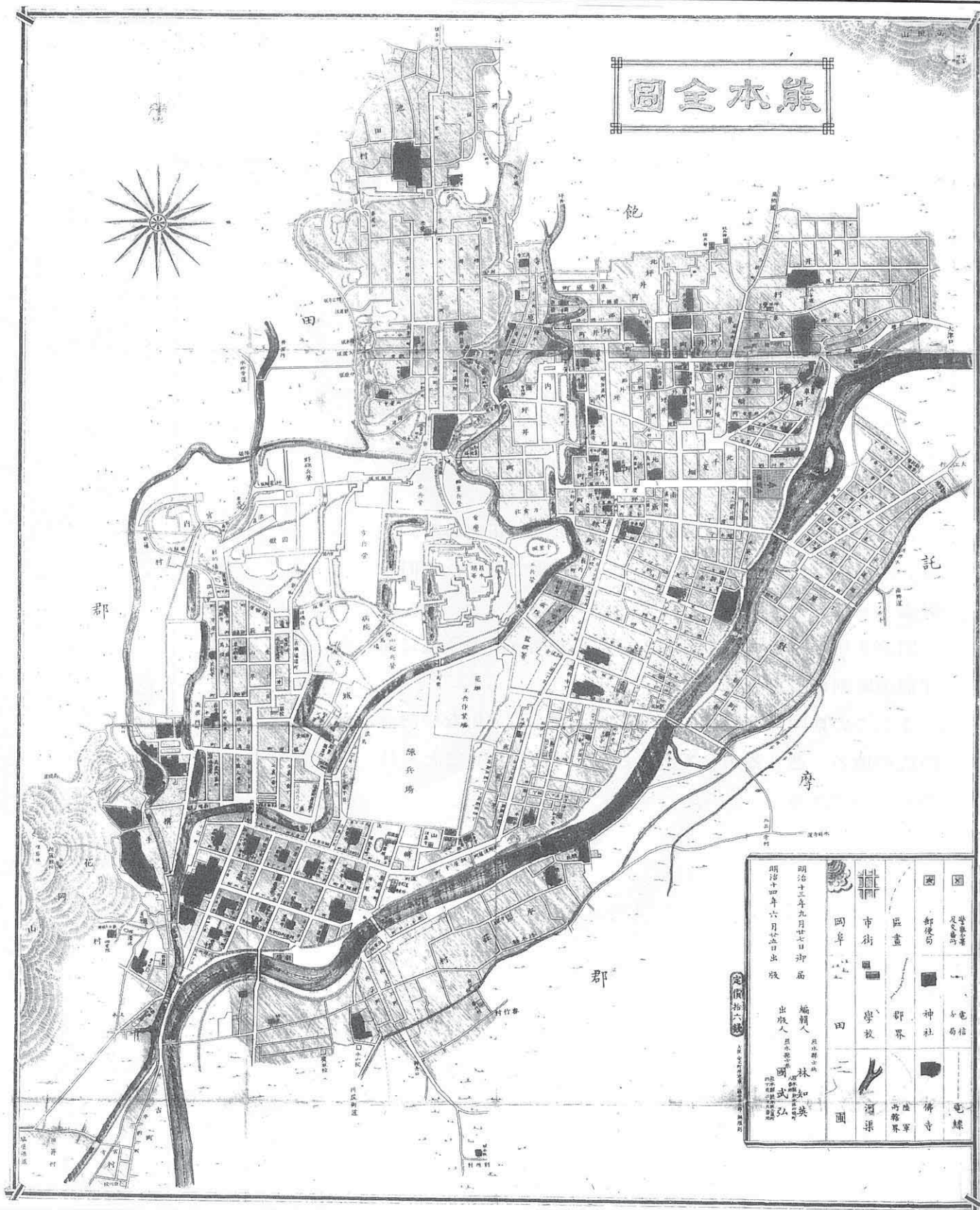
明治13年9月、熊本県士族・林知英の編集による「熊本全図」は、西南の役後の熊本市街の変貌をよく表している。

花畑邸は、花畑工兵作業場と記されているが8～9年にはここに歩兵・工兵の第16大隊が駐屯していた。これが千葉城に移った後は完全に工場となり、山崎・天神・喰違本丁などは無くなって、広大な練兵場となっている。

県庁は二本木から古城に移り、古城にあった旧英学校・医学校跡には警察署が新築されている。

医学校は組織替えされ、監獄所前（現九州郵政局の場所）へ移り、藤崎宮も現在地へ移った後は刑務所となっている。

このように城内に軍施設が充満しているのは、西南の役の後遺症ともいえるわけで富国強兵策の表われであろう。



名称：熊本市及び付近実測図

年代：大正元年（1921）

所蔵：熊本市役所

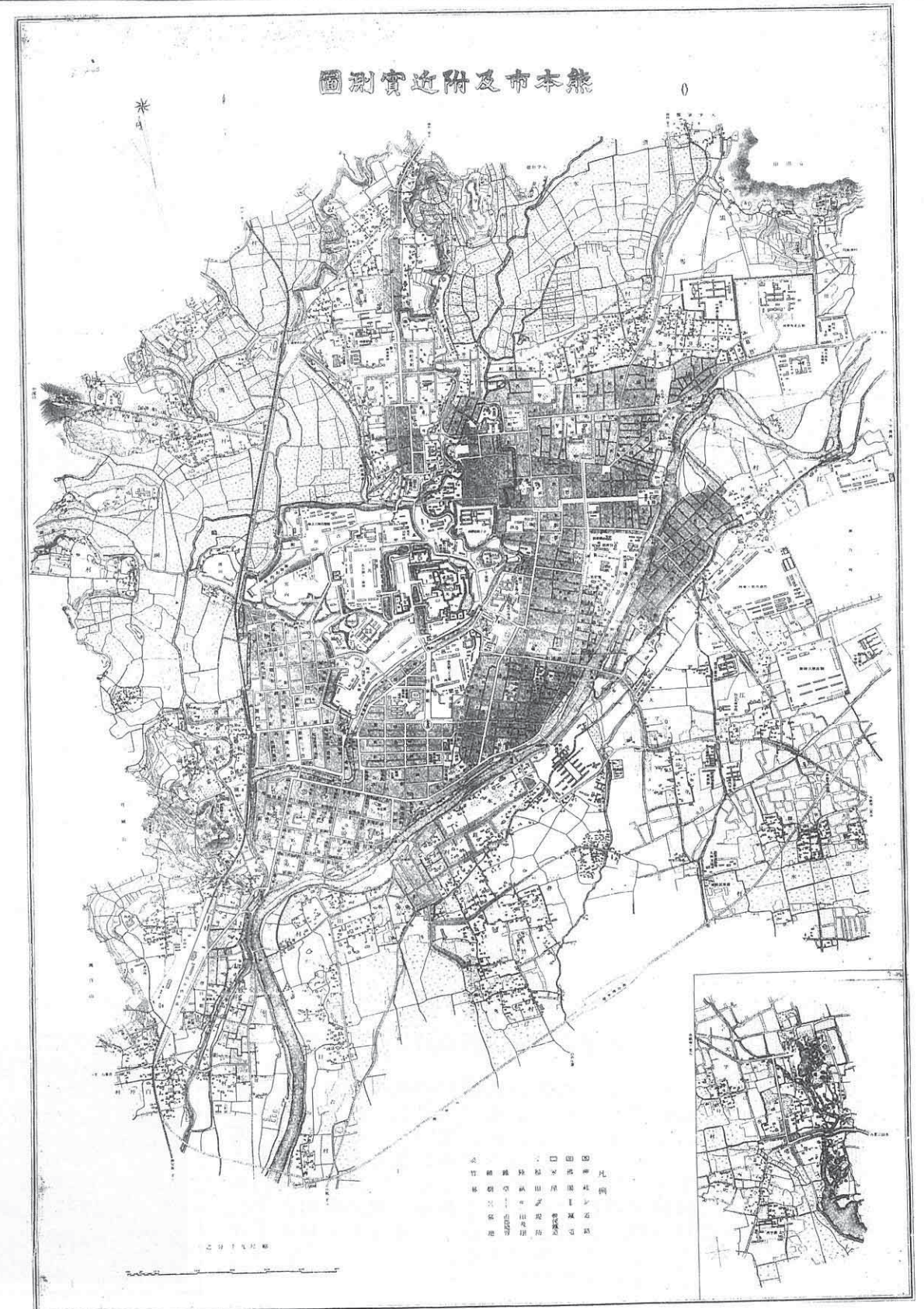
熊本城内の第6師団は装備の近代化に伴って手狭になり、練兵場は大江渡鹿に移転（明治36）し、跡地が整備され行幸町・天神町・桜町・花畑町・辛島町・練兵町と名が付けられている。

その後、二の丸の13連隊・花畑の23連隊が渡鹿に移るが、この地図はその直前の状況が把握できる。この時期には熊本城にあったさまざまな施設が移転し、藤崎宮跡にあった刑務所（監獄）も大江村に移り、練兵場跡には専売局熊本製造所（明治44）が建てられた。

現市役所の位置にあった熊本監獄所はまだ存在し、その前の高等小学校は山崎校と手取校が合併した城東小学校である。

古城にあった県庁も千反畑へ移り、跡地は陸軍兵器廠となりそのまま昭和20年まで続く。

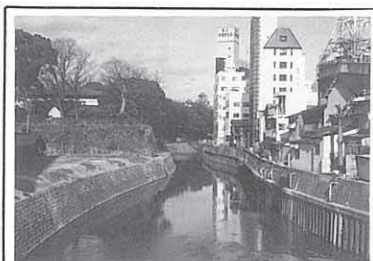
熊本城は鹿児島本線の開通（明治24）で、段山付近が掘削された。また北側の新堀は軽便鉄道の開通で土橋がなくなり橋が架けられるようになる。監物台には陸軍幼年学校が全国校6校の一つとして開校される（のち軍縮のため閉校）。市街は東へ東へと発展の一途をたどる状況を物語っている。



〔古写真〕

絵図とともに、城下町の様子を伝える貴重な史料として、富重利平に代表される明治、大正の人々が撮影した古写真がある。熊本城をはじめとする各地の風景は、当時の町の様子だけでなく、人々の暮らしまでうかがい知ることができるものである。

現在の
船場橋からの
風景

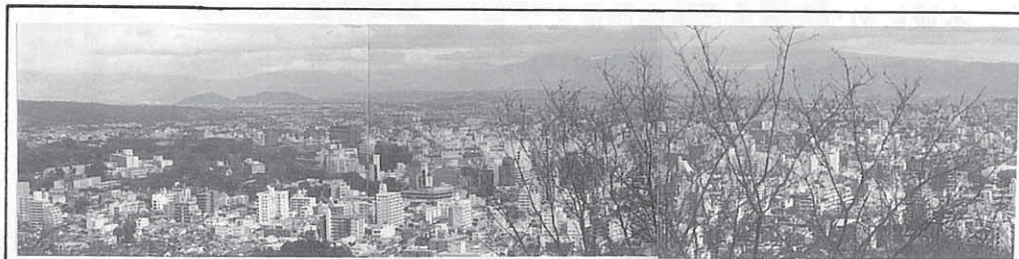


1. 船場橋から望む天守閣；明治4,5年(1871,2)

船場橋から坪井川の上手を眺めた光景であり、右手の家には川舟が繋がれており、左手の石垣の上は医学校である。中央にある櫓は堀平太左衛門預櫓で、この下に竹矢来を組んで一般人の進入を禁じている。遠景は熊本城の大・小の天守で、本丸のそのほかの櫓も木の間がくれに姿を見せている。
(熊日刊「図説熊本・わが街」より)



現在の
花岡山からの
風景



2. 明治中期の熊本市街；明治27年(1894)頃

写真右手の四角い広場が山崎練兵場、その右手の町並が古町である。白く光った坪井川には明八橋が架かり、古町と新町を分けている。写真左手の台地が茶臼山で軍の施設が並んでおり、やや左寄りに宇土櫓が見える。台地の下の白い二階建の洋館は偕行社である。練兵場の左手には騎兵隊の兵舎と歩兵第二三連隊の兵営が向かい合っているのが見える。
(「富重利平作品集」より)

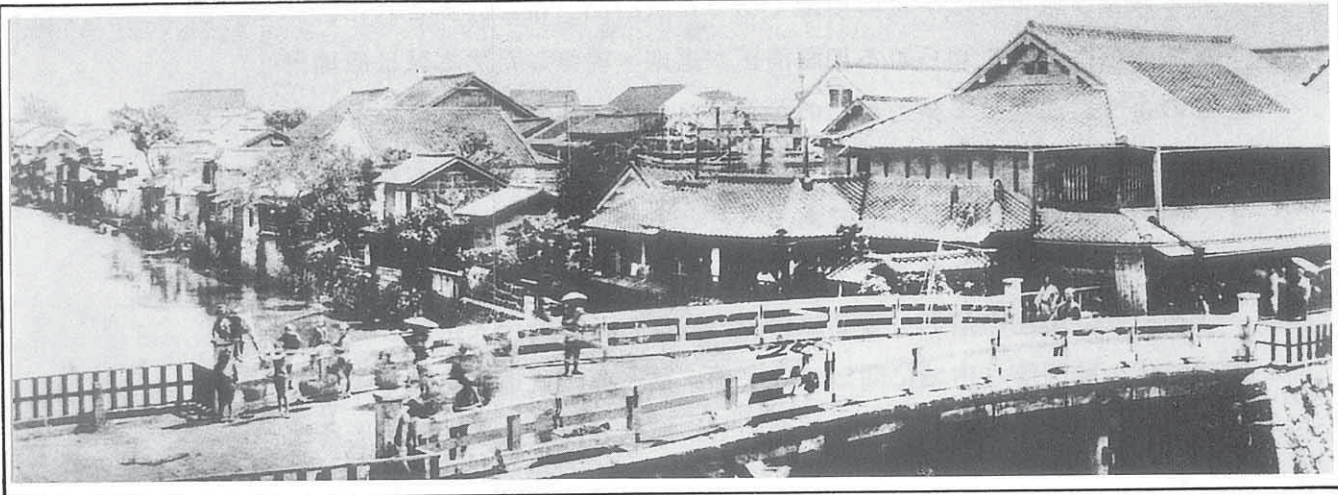




現在の
新三丁目橋
(明八橋)

3. 新三丁目門

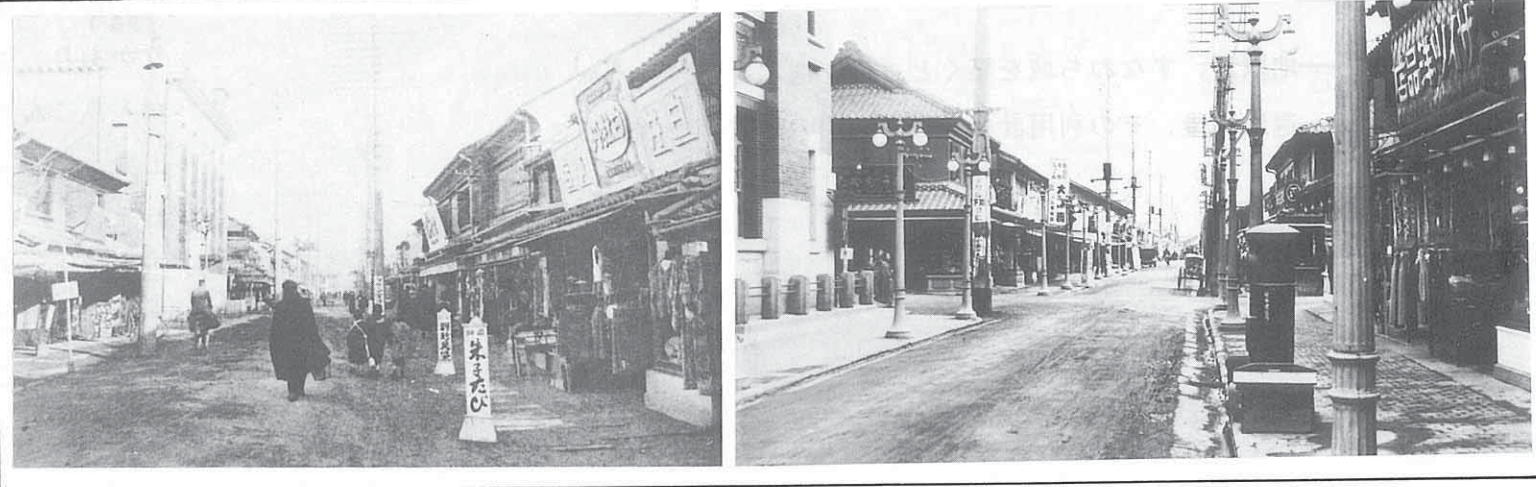
新三丁目橋は明治8年、石橋に架け替えられ明八橋となる。坪井川ぞいの家並みは唐人町裏。新町と結ぶ交通の要衝にあたり、野菜や魚類など生活物質の流通も盛んで、左手の橋際に新三丁目御門があった。
(熊日刊「図説熊本・わが街」より)



現在の
唐人町筋
(唐人町通り)

4. 唐人町筋：大正9年(1920)・大正14年(1925)

中唐人町から東向きに写した写真であり、マント姿の男や子供たちが見られる。右は大正14年3月に開かれる三大事業記念国産共進会に間に合わせるため、街灯を建て、歩道の木煉瓦工事をすすめ、工事が完成したところである。左写真左側の洋館は帝国銀行で、右写真に一部見えているものであり、この頃には第一銀行熊本支店となっていた。この建物は熊本中央信用金庫として現存している。
(「富重利平作品集」より)



1 - 3 城下町の構造

(1) 原地形の復原

熊本城及び城下町は中世の要地であった茶臼山一帯に計画された。

築城の名手として知られる加藤清正が選地・縄張した熊本城は原地形をどのように改変して築造したのかということは非常に興味深いことである（現在でも高速道路・鉄道等の土木工事では盛土・切土をいかにうまく使い分けるかがポイントである）とともに、熊本城の変遷を研究する際には重要な資料となる。

ここでは、現在の地形（等高線の読み取り）、明治・大正期の地図、江戸時代の絵図等（古城に関しては一部、第一高校武道館建築の際のボーリングデータを参考）を照らし合わせ、熊本城及び同城下の地形を復原した。

今回の分析ではボーリングデータが不足するため正確な地形復原とは言い難いが、おおよその傾向は表現できたと考えられる。

なお、ボーリングデータは盛土か地山かを明瞭にすることができ、地形復原の推定補足、修正するのに非常に有効な資料である。

今後も城下町域において建物の更新が行われる場合には是非ともボーリング調査を行い、データのストックを図るべきである。

★^{せんち}選地——地取り、すなわち城を築くところを選ぶこと。

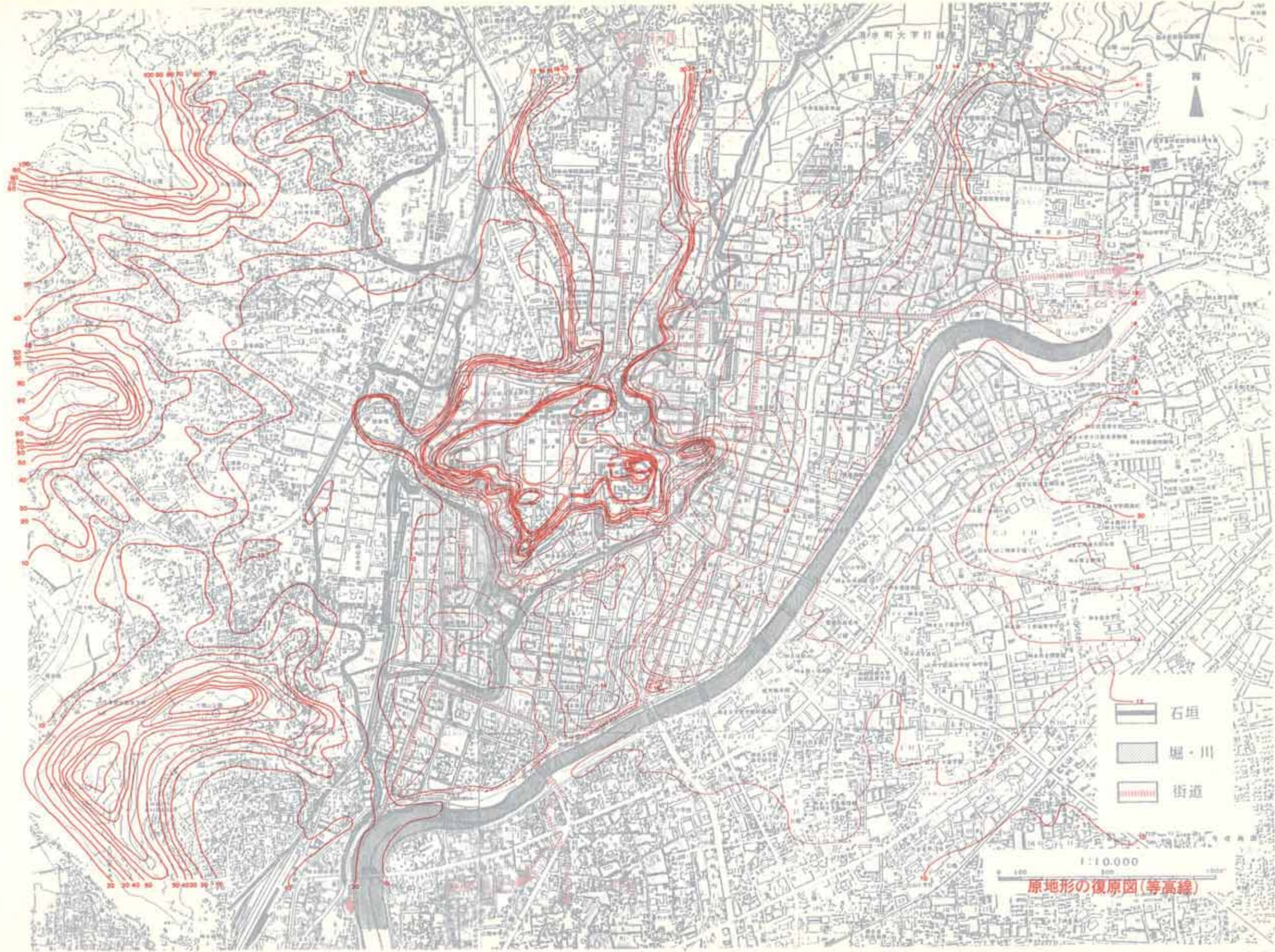
★^{なわばり}縄張——選地の後、その利用計画をなし、門の配置等をきめること。




[城下]

- イ・薩摩街道から豊後街道へ城内を通らずに城下を通る道があるが、これはもともと坪井川の自然堤防の上にあった道を利用しているものとみられる。
- ロ・坪井川の改修で流路を現在のように熊本城の回りを巡るように加藤清正が変更したと伝えられているが、この変更はもともと河川の跡を利用したものと考えられる。
- ハ・新町は加藤時代に盛土されて町づくりを行っている。
- ニ・内坪井の堀は坪井川の流路跡を利用した。

[城内]

- ホ・古城の石垣部分は深い所で7mの盛土がされており、中世城郭ではなく加藤氏入国時に築造されたと考えられる。
- ヘ・中世の熊本城は現在の国立病院付近か、藤崎宮跡（現在の藤崎台球場付近）かのいずれかであろう。
- ト・本丸部分は茶臼山という独立丘陵で標高約47mであったろう。
- チ・監物櫓付近から二の丸、国立病院にかけてゆるやかな屋根状の高まりがあり、宇土櫓の西側と西出丸の西側の二重の空堀はもともと谷が入りこんでいた可能性が強い。
- リ・出丸北付近（現在の加藤神社）はかなり盛土されている可能性がある。
- ヌ・西櫓門は、古城部分や中世隈本城部分と直結する機能があった。
- ル・二の丸、三の丸間の段差は活断層で、この上に築造された百間石垣は数回崩れて修理している（石垣の積みなおしが確認できる）のうなずける。



-  石垣
-  堀・川
-  街道

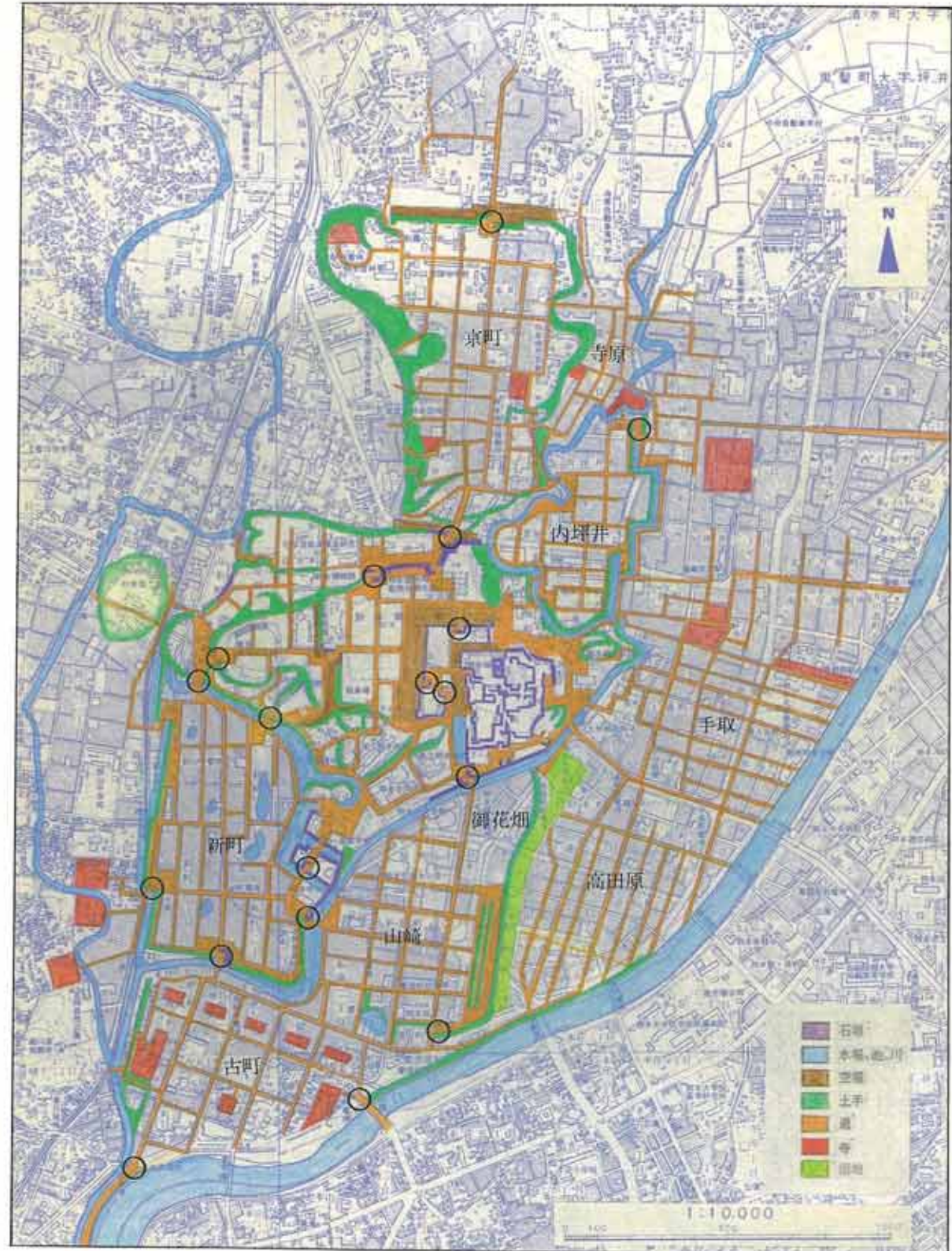
1:10,000

原地形の復原図(等高線)

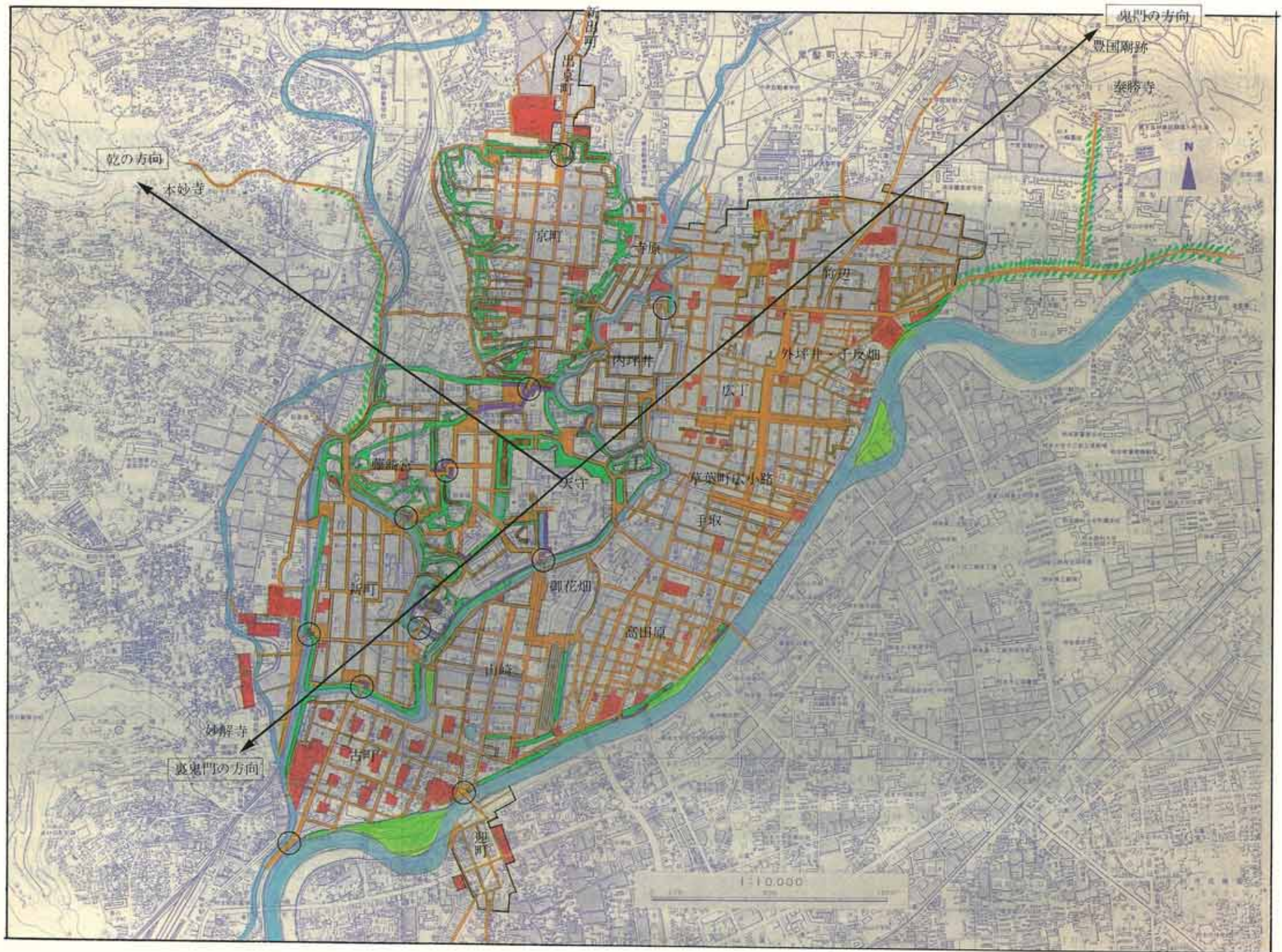
(2) 熊本城と城下町の方位的基本構造

熊本城と城下町の配置の方位的基本構造は次のとおりであり、風水説の影響を強く受けている。

- 1 藤崎八幡宮に対置して天守を東西の軸線としている。
- 2 本丸の中心から鬼門方向（北東）に出隅がないように構成されている。
- 3 乾の方向（北西）に特別の櫓をもってくる。つまり本丸中心部から天守、宇土櫓、森本櫓が配置されその延長上に忠広の時代に本妙寺が配置され、清正自身の墓が配置される。
- 4 本丸中心の真南に、普段の居住場所として花畑御殿を造営した。
- 5 城下町の鬼門、裏鬼門（南西）に寺を配置した。また、細川氏時代には鬼門に泰勝寺、裏鬼門に妙解寺を配しているため、両者を結ぶ線上に熊本城本丸の中心が位置している。
- 6 熊本城下町はブロック化されているが各ブロック毎に軸が異なるのが特徴で本丸の中心部（宇土櫓と天守の間）に城下町の軸線の中心がくることが多い。新町、古町は古城との関係があり、他は本丸との関連が考えられる。
- 7 虎口あるいは城下町内各ブロックの出入り口（○印）の配置は計画的である。
- 8 古町には金峰山が正面に見える軸があるが、山の頂上に向かった方向に城下町の軸線をとる手法はあまり使われていない。



[現在の地図に寛永 8,9年頃の絵図を重ねた図]



[現在の地図に幕末の絵図を重ねた図]

第2章 景観整備の基本方針

2-1 都市における景観整備の方向

近年都市の基盤整備がある程度完了すると、しだいに精神の豊かさ、つまり「うるおい」や「ゆとり」を求める傾向が高まり、多くの都市で良好な都市景観を形成を求めて様々な方策が検討されている。景観のなかでも歴史景観と自然景観は2つの大きな軸としてどの都市でも注目されているものであろうが、熊本市においても熊本城に代表される歴史景観や江津湖に代表される自然景観は市のシンボルといっても過言ではない。これらが市民にとって特にかげがえのないのは、一旦失われたら元に戻すのは非常に困難なもので、極言すれば二度と同じ姿には戻らないものだからである。また、それは熊本市としてのアイデンティティの喪失につながるものである。

歴史や自然を核とした景観整備を進めるにあたっては大きな原則が存在する。それは「まず本来の姿を見極め、正しくその価値を位置づけること、次にその姿をどのように現在の生活に活かし、どのように後世に伝えるか」ということである。つまり十分な調査と市民を主体とした計画立案という原則である。

また、京都等の古都にみられるように歴史的な景観が存在するのは人々の生活や文化に支えられていることは言うまでもない。加えて、これら歴史景観にしても自然景観にしても、ともすれば目にみえるものだけに注目がちであるが、実はその背景には人々の営みがあり、自然の営みがあるということをおぼろげにわすれてはならない。

都市には固有の歴史や文化の原点が存在し、悠久の時の流れにより集積された文化がある。本来歴史景観の整備の根底には文化そのものの継承発展という目的があるべきで、フィジカルなものソフトなもの両立を見すえて事業を行わなければならない。

2-2 熊本市の景観整備

熊本市は今年で市制百周年を迎えるが、江戸時代の絵図と現在の地図を比較しても明らかなように、この都市の旧市街における基本構造は加藤清正が約400年前に築いたものからほとんど変化していないことがわかる。

また、城下町中心に位置する熊本城は平山城という特徴から、その城域の大半が原形をとどめ、景観の潜在的な構造も変化していないといえよう。また、江戸時代は細川氏の統治が寛永期から廃藩置県におよぶまで安定していたので、城下町の詳しい絵図がおびただしく残されているし、明治の古写真も数多く残り、史料には事欠かない。

このような状況を考えると熊本市の景観整備の今後あるべき姿は熊本城を中心とした都市構造、景観構造を否定して全く新たな方向を目指す（これは熊本城の存在自体を否定する）よりも、その構造を活かした計画を選択するべきであろう。ただ、熊本市には城下町の基本構造は残っていても歴史的街区といえるべき群としての町並はほとんど存在しない状態である。江戸時代の建物も数少なく、いわゆる町並保存できるところは極めて限られている。

しかし、熊本には細川家のもつ文化的素養がしだいに熊本人に溶け出し、その継承がなされている。つまり、肥後六花に代表される園芸文化や茶の湯等の伝統文化を育ててきた土壌があり、フィールドが残っている。

よって熊本市の景観整備は都市の生活や文化そのものの高まりをめざして行うべきである。熊本市においても市民生活を含めた豊かなフィールドを提供できるだけの素材は加藤氏の熊本城と細川氏の文化を中心に考えただけでも十分にあり、今後、いかにそのフィールドを発展させ充実させていくかが最大の目標となる。

この町に残る歴史的なフィールドは人々の記憶や意識にあざやかに働きかけ、歴史と文化の中にある自分を認識できるものである。フィールドミュージアム熊本城下町は、近年急速に失われつつある熊本市のアイデンティティを再構築する手段であり、将来に伝えてゆく文化そのものである。

2-3 'フィールドミュージアム' への 歴史と概念

(1) 野外展示型と現地保存型

発掘された遺物が考古学研究上の主要な対象であった時代には、博物館展示の方法は、遺物そのものを見せるという以上のことは考えられなかった。しかし現代の考古学は遺物だけでなく、遺構や遺跡とそれを取りまく環境を対象として総合的に調査を行うようになりつつある。大規模なジオラマやレプリカを使ったディスプレイが主流をなしてきたのは、このような考古学的成果を反映しているといえよう。

また博物館内には入りきれない大型の展示物（竪穴式住居や民家など）を館外に展示する方法もはじまり、さらには館外展示を主体とする野外博物館（館外展示型）も発展してきた。とくに現地では、保存が不可能な民家・商家などを一か所に集積して、安全に保存・維持する動き（明治村等）も高まっている。

これに対して全く異なった方向からのアプローチが一方でなされてきた。つまり現地保存型の野外博物館とも言えるものである。

従来埋蔵文化財の保存は、その場をそのままの形で全く手を加えないで保存するという方法がとられてきた。しかし、これでは一般市民にとってどれほどの価値があるのかわからないという疑問がはじめ、もっとわかりやすい形で整備し、活用しようという動きが高まってきた。この動きは、昭和40年代に史跡公園という形で出現しはじめた。しかし、市民の目には、公園内に遺跡があるという程度の認識に終わりがちであった。このようなあいまいな形で行われてきた保存整備の反省の上になち、遺構や遺跡そのものを主役にした野外博物館（現地保存型）の考え方が現われはじめている。これらは現地で保存しながら、歴史教育の場として積極的に活用しようというものである。

(2) さらに広域へ

広域的な遺跡郡（明日香村他）の保存、町並み保存（妻籠他）、歴史的背景や環境の保存という課題がでてくるにおよび、複雑多岐にわたる問題解決方法と、実状に合ったすぐれた計画が求められることになった。そこでは、人びとが現実に生活しており、単純に公開化することも、サイトミュージアムとして復原的整備を行うことも、必ずしも住民の利害と一致しないことが多いのである。歴史系の分野から出発したこれらの整備は、ここに至って、自然史系の野外博物館の発想を学ばなければならぬのではなかろうか。

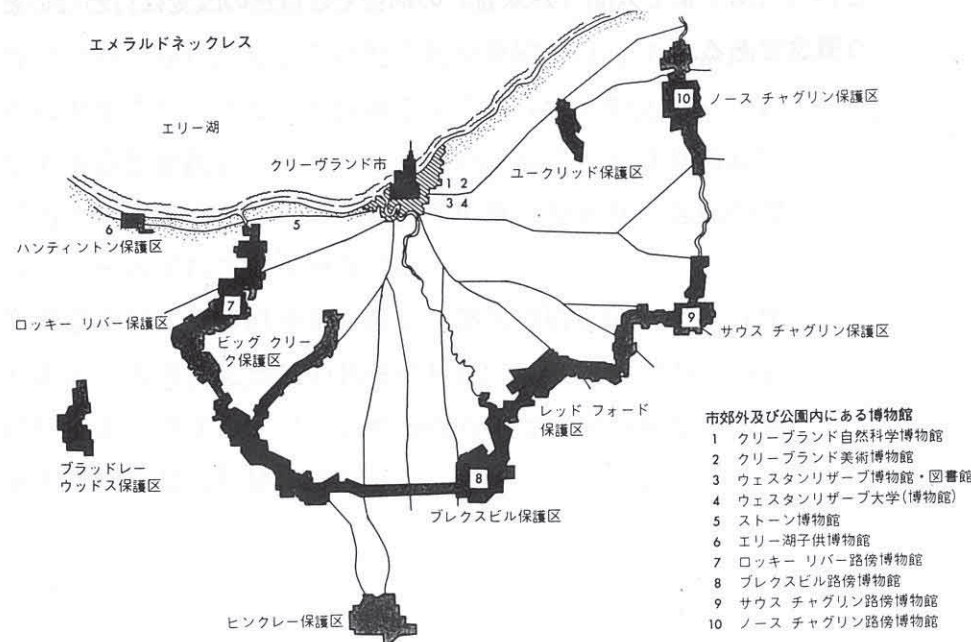
フィールドミュージアム（Field Museum）とは、本来、地質や動物、植物等自然史系を対象とした野外博物館の一定義であり、自然保護地域（Natural Reserves）という言葉も使われているようにアメリカの国立公園の自然環境保護思想から始まったものである。フィールドミュージアムは、自然の営みを続ける動物、植物の中に観察者として人間が入るといふ、あくまで人間（外来者）の都合では自然の改変は行わないという概念である。

(3) 野外博物館に於けるフィールドの意味

これからは、積極的に野外（フィールド）という意味をハード面（施設）だけでなくソフト面（活動）を含めて掘り起こすべきである。

野外博物館では、あるく、みる、きく等、自分の体験を通して学ぶことが大切であり、屋内展示によくありがちな、体系立ってはいても与えられるだけの学習から、脱皮できる場として期待できるのではないだろうか。自然や人びとの生活、文化遺産のなかに潜む有機的体系をみずから把み取る学習の場こそ、現代人に必要とされるものであると思われる。

このように考えると、野外博物館が最終的に目指すものは、“学習者、観察者としての一般市民に対して、その対象となる豊かなフィールドの提供をいかに行うか”ということに尽きるのではないだろうか。



(4) 都市全体を野外博物館に

ひと頃よりそのスピードは鈍っているといっても、開発による自然の破壊、文化遺産の破壊は各地で問題をひき起こし、一見便利になった生活とひきかえに環境悪化が着実に進んでいる。これを克服するためには、地域全体を対象とした広域整備が不可欠となるであろう。

この考え方を現在の都市に読みかえることにより、熊本城周辺における景観整備のひとつのアプローチが提唱できよう。

つまり、都市におけるフィールドミュージアムの概念とは、生物のように日々変化する都市を強制的に改変させるのではなく、都市の中にある景観要素のひとつひとつが歴史を語りかける展示物であると捉え、市民や観光客が都市に入り込み、観察し体験することにより、「まち」そのものを味わうことができるシステムを創る考え方である。

日本の中では、本格的取り組みは行われていないが、クリーブランド市の★エメラルドネックレスなどを範として、日本の風土に根ざした自然と文化遺産を中心とする広域整備、つまり「まち全体を野外博物館にする」という計画手法の開発が望まれる。この時、自然史系・人文系を含めた野外博物館の理念や、ソフト・ハード両面にわたるノウハウが必ず役に立ち、悪化した生活環境の建て直しに有効な力を発揮することのできるのではなかろうか。

★エメラルドネックレス

アメリカのオハイオ州エリー湖畔にあるクリーブランド市立公園は、クリーブランド市が、市民の憩いの場所、学びの場所、そして活動の泉となることを願ってつくったもので、市の中心部から20～30kmの周辺に環状に（ネックレス）豊かな緑（エメラルド）を設け、その中に自然遺跡（地質や動植物の天然記念物）を包含している。ここを訪れる人々は、年間で、クリーブランド市の人口をはるかに超えているという。（コンセルボ1984 No.6より）

2-4 フィールドミュージアム化の手法

(1) 都市の歴史の抽出とストーリー設定

都市にはそれぞれ固有の歴史が存在する。その歴史を正しく認識すること、正しく評価することが大切である。このために都市の中に残る歴史的、文化的要素をすべて洗い出す作業を行う。これらを整理することによって都市の歴史の基軸となるべきものがわかり、整備のストーリー、テーマが明確に出来る。おそらくどの都市も時代という軸で分けると、3テーマほどに集約できるのではなかろうか。

(2) 計画フィルター

歴史的都市景観整備の理念から、保存と継承（まもる）、伝達（つたえる）、創造（つくる）という三つの「計画フィルター」というものが設定できる。具体的計画を作成する場合、都市歴史の基軸（テーマ）となるものをこの3つのフィルターを通すことによって、より具体的でもれがなく、また「まもる」「つたえる」「つくる」を総合した計画をうちだすことができる。

「有形、無形の文化財などの、原形そのものが大切に価値があるものを継承する」

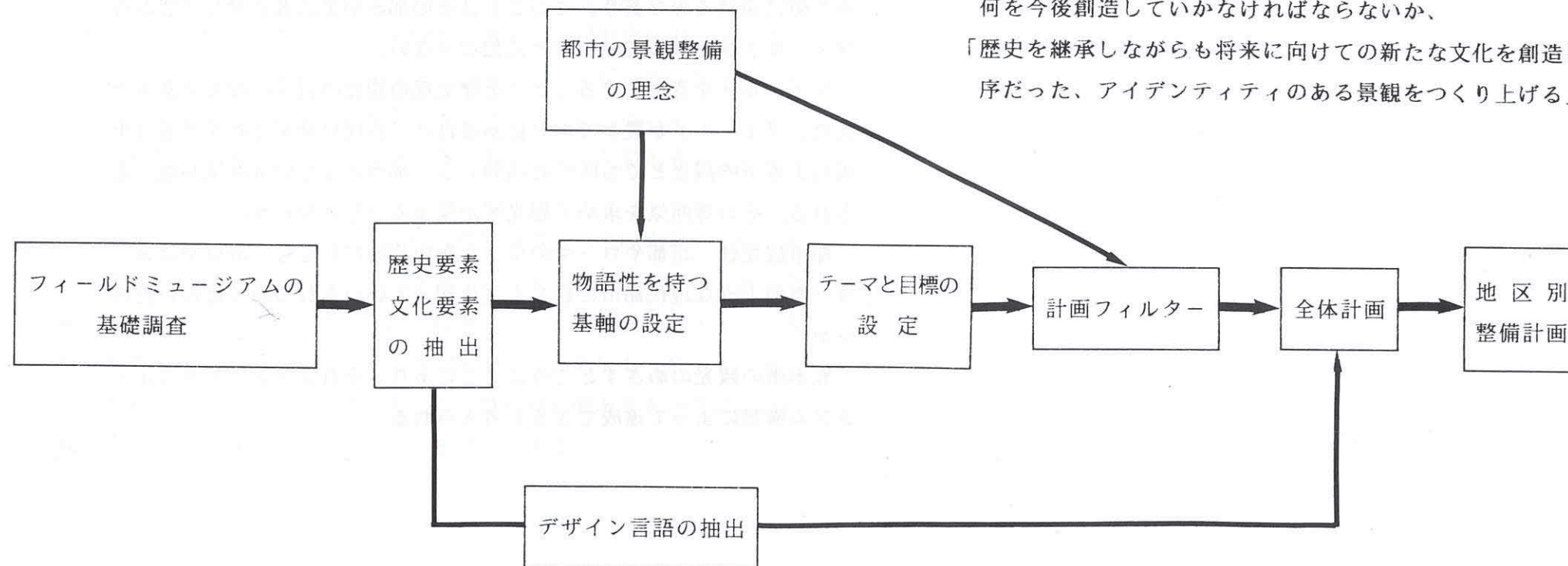
何を市民に伝えなければならないか、

「歴史的文化を文字や言葉だけでなく、現地で体験可能とするための情報伝達を図る」

何を今後創造していかなければならないか、

「歴史を継承しながらも将来に向けての新たな文化を創造し、都市の秩序だった、アイデンティティのある景観をつくり上げる」

<フィールドミュージアムの整備フロー>



2-5 デザイン言語の抽出

歴史や風土に根ざした都市固有のデザインの言語が存在する場合がある。この固有のデザイン言語を歴史的要素の抽出という作業の中で見出し、それを都市の景観デザインの核とすれば、過去から未来へと連続する都市づくりができる。

しかし、ともすれば伝統的形態をそのまま真似をする安易な取り込みがみうけられるので、気をつけるべきである。

伝統的形態をそのまま真似るにしても、それをもとに新たにデザインするにしても、またその精神だけ受け継ぐにしても、そこには創作的活動が介在しなければならない。常に人々の心の中に感動を呼ぶものでなければならず、ここにおいて真の意味での創造的発展がなされるのであろう。

2-6 フィールドミュージアムと観光

観光（サイトシーイング）は文字通り遺跡をみることをいう意味からきているのであろう。

観光とは歴史をみることから始まっている。ただ、歴史とは目にみえるものだけではなく、目にみえない文化的要素も含めて考えるべきであることは言うまでもない。

京都・奈良・金沢等は、ある程度歴史的要素が形として集合していることも大きな要因であろうが、それは市全体からみればごくわずかな地域である。しかし人々は、その地域だけにとどまらず、その都市全体に点在するものまで足を運び、都市の雰囲気味わう。つまり先にあげた都市は単に古い寺院や武家屋敷等の「物体」^{もの}だけが残っているのではなく、その都市での「生活」が「物体」と一体になり、都市全体が永年醸成された文化を有しているということである。人々はその文化を体験するために訪れるのであり、このことはその都市が来訪者に対して豊かなフィールドを提供していることに他ならない。

フィールドを豊かにすることこそ歴史都市観光の目玉になるであろう。また、フィールドが豊かであればあるほど、市民自身がそれを享受（市民による市内観光とでも呼べる活動）し、都市としての雰囲気が醸し出される。その雰囲気を求めて観光客が集まることとなろう。

都市観光は、京都やローマのような歴史都市にしても、東京やニューヨークのような現代都市にしても文化観光といいきれるのではないだろうか。

熊本市の観光のめざすところはここであり、それはフィールドミュージアム構想によって達成できると考えられる。

2-7 都市景観の共有概念

現在の日本における所有の概念は、基本的には公と私という2元論的発想しかない。しかし過去には京都の町衆による会所の共同所有（現在は財団法人化されている）があったり、入会地や町村における区有のように共有的発想がみられる。都市景観も京都等である時期には共有しているという意識があったようで、窓、外壁、塀の形式や色彩等にある種の自己規制があったときく。

現在の私達には、この共有の概念がうすれているのではないだろうか。景観こそ「公」や「私」ではなく、「共」の意識でつくられるべきである。

現在、文化財は指定という名で保存が行われている。これは所有形態に関係なく、国民共有の財産として保護しようという発想で「共」の発想にもとづいていると解釈できる。ただ、指定されていないが共有財産として重要であるという認識で、京都府のように文化財の登録制度を設けたり、知床をはじめ熊本でも大切な自然を市民がお金を出しあって所有し、保存しようとする、ナショナルトラスト、シビックトラストの動きがあり、名実とも共同所有をしようという動きがある。イギリス等では広大な館や敷地を残すため、居住権をもちながら財産を放棄する方式も取られている。

今後よりよい景観づくりや文化的な環境を創造していくためには、幅広く歴史的遺産を残していく必要があり、今までの公有化方式、指定方式以外にも「共」という概念を前面に押し出した新たなシステムづくりが必要である。また、新たな都市景観の創造のためにも「公」、「私」にかかわらず一つ一つの建築のあり方、特に景観的あり方が常に市民の共有物という認識をもってつくられるべきである。

第3章 フィールドミュージアムの 基礎調査

3-1 調査の概要

フィールドミュージアム熊本城下町を構成している要素の抽出のためまず基礎調査を行う。フィールドミュージアム熊本城下町は城郭および城下町全域を対象とする。フィールドとなる熊本城下町の最大の特徴は、江戸時代に既に町単位の区分が明確に行われていた点で、この町単位はそれぞれに歴史の変遷を持っており、独自の雰囲気を現代に伝えている。これらは現在の学校校区とも重なり合うところが多いことからコミュニティ単位ともよく整合しているといえよう。基礎調査はこの町単位ごとに行うこととする。

[調査範囲（地区区分）]

町単位が明確に現われている江戸後期の「熊本府の絵図」を基本に幕末までにできた熊本城周辺の町から、現在の町丁区分を考慮した上で16地区を設定した。

[調査内容]

地区構成	地区を構成している現町丁である。▲は一部に限る。
旧地名及び呼称	江戸時代末の絵図及び「白川県肥後国全図」により主なものをあげた。
地区面積	1/10,000の地図をプランメーターによって測定した。河川的面積は除いた。
地区人口・地区人口密度	国勢調査（昭和60年10月1日現在）の町丁別人口、人口密度を地区ごとに編集した。町丁が2地区にまたがる場合は面積比で分割した。
用途地域面積	熊本都市計画総括図を、プランメーターによって測定した。

地区の歴史	以下の資料を参考とした。 「熊本県大百科事典」 (熊本日日新聞社) 「図説熊本・わが街」 (熊本日日新聞社) 「角川日本地名大辞典43熊本県」 (角川書店) 一新、五福、慶徳、城東、碩台、壺川、黒髪、花園、城西、向山、本荘の各学校史。
フィールド調査	各地区について地区の特性、歴史を表わすものをフィールドミュージアムの要素として抽出する。フィールドミュージアムの要素は以下のものがあげられる。 * 城、城下町の構造に関するもの (石垣、堀、川、街道、その他遺構) * 城下町形成から現在までにおいて、その地区の特性や歴史を反映するもの (建物、工作物、通り、樹木、等) * 城・城下町を眺望できる地点 * 技術、工芸、園芸、芸能等に関すること * 文学、民話、民謡、伝承、祭り等に関すること * 特産品、銘菓等 (製造・販売している店等) * 公共の場 (施設、公園等) 今回は主なものを取り上げ地区別にまとめた。

地区区分図

- (A) 城内 じょうない
- (B) 山崎 やまさき
- (C) 高田原 こうたばる
- (D) 手取 てとり
- (E) 外坪井・千反畑 そとつばい せんだんばた
- (F) 竹辺 たけべ
- (G) 内坪井 うちつばい
- (H) 寺原 てらばる
- (I) 京町・出京町 きょうまち できょうまち
- (J) 新町 しんまち
- (K) 古町 ふるまち
- (L) 迎町 むかえまち
- (M) 新屋敷 しんやしき
- (N) 黒髪 くろかみ
- (O) 本妙寺・島崎 ほんみょうじ しまさき
- (P) 横手・春日 よこて かすが

この順序は絵図の凡例に依っている。



3-2 地区の歴史と現況

(A) 城内

地区のデータ	地区構成	二の丸 古城町 宮内 古京町 千葉城町▲ 本丸 花畑町 新市街▲	
	旧地名及び呼称	御城 千葉城 時習館 二ノ丸古京町 漆畑 藤崎宮 宮内 桜馬場 古城堀端 古城 棒安坂 砂薬師坂 新タブノキ坂 槇島坂 薬師坂 法華坂 鞍掛坂 慶宅坂 南坂	
	地区面積	104.7 ha	
	地区人口	S50 2,617 人	
		S60 1,731 人	
	地区人口密度	S60 15.5 人/ha	
用途地域	住居地域	91.1 ha (87%)	
	商業地域	13.6 ha (13%)	

地区の歴史

熊本城は出田氏の千葉城から、鹿子木氏の隈本城、加藤氏の古城を経て現在の茶臼山に築城されるようになり、近世城郭の姿を整えた。

寛永9年(1632)より、細川氏が12代続き、明治維新を迎えることになるが、その間熊本城は大規模な変革を受けることもなかったと想定される。明治10年(1877)西南の役で天守をはじめとする建物はほとんど姿を消し、現在は十数棟が存するのみである。

二の丸は、長岡家、有吉家、小笠原家等家老の屋敷が配され重要な位置であったと想定される。また、古京町、古城も武家屋敷となっていた。

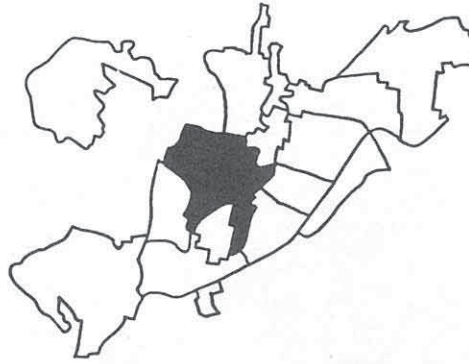
古京町は築城以前には京町と称された町家があったが、築城の際京町台に移されたため「新」京町に対して古京町と呼ぶようになったといわれている。第二次世界大戦までは陸軍が占有しており、現在は公園として整備されていたり、化血研や博物館等の建物が建っている。

藤崎台球場付近はかつて藤崎宮が鎮座していたところであり、天然記念物の大楠が歴史を偲ばせる。

古城は廃城後明治4年の医学校・洋学校、同8年の県庁、同9年の裁判所・警察本部と幾度も公共施設が出入りしたところであり、明治20年以降は陸軍の兵器廠、昭和35年に第一高校が入り現在に至っている。

千葉城は昭和3年に陸軍偕行社が設置された後、同37年にNHKが入った。

なお、昭和30年、城内の大部分は特別史跡として指定され整備が続けられている。



名 称	概 要
1 花 畑 公 園	古くは代継宮 <small>よつぎぐう</small> があり、その後花畑邸となり加藤清正公は城内からここに住居を移し、細川家でも上屋敷として住んだ。玄関付大広間は矢部城を移したものであったと言われている。明治4年(1871)には鎮台營所となり西南の役ですべて焼失した。その後大正13年まで23連隊の兵營となった。花畑公園は花畑邸の一部であり現在の大楠は代継宮からの名残りである。
2 下 馬 橋 跡	城内への南の登城口であり、太鼓橋が架かっていた。城内に入る時これから先は馬を降りる規則であったという。明治35年行幸橋ができた時この橋は廃止され、その橋脚の石柱は現在県立熊本高校の正門となっている。
3 南 の 登 城 口	南面の防備口として最も重要な構口 <small>かまえぐち</small> で西南の役の際、官軍への連絡のため谷村景介が脱出した。
4 肥 後 六 花 園	城内長堀内側に熊本の武士の園芸として知られる六花(肥後椿・肥後芍薬・肥後花芍蒲・肥後朝顔・肥後菊・肥後山茶花)を栽培している。
5 須 戸 口 門	食料などの搬入口で、病人などがあると、ここから城外に出した。
6 備 前 堀	城内唯一の水堀で、すぐ横に佐々備前の屋敷があったことに由来すると言われている。
7 旧藩時代の城内への東からの入口坂と梅屋敷	藪ノ内橋から入り木戸(現在の熊本城稲荷神社境内)を上ると東十八間櫓下の枡形には、かつて東櫓門が設けられていた。十八間櫓部分の石垣は高さ十間、城内でも屈指の高石垣で東部の要害をなしている。梅屋敷は梅の多かった武家屋敷跡であろう。紅梅、白梅が今も残っている。
8 午 砲 台 跡 (月 見 台)	明治5年から午砲台が置かれ、ここから正午を知らせる合図“ドン”が打たれていた。一時サイレンに切り替えられたが不評で、再度復活され、昭和14年まで続いた。

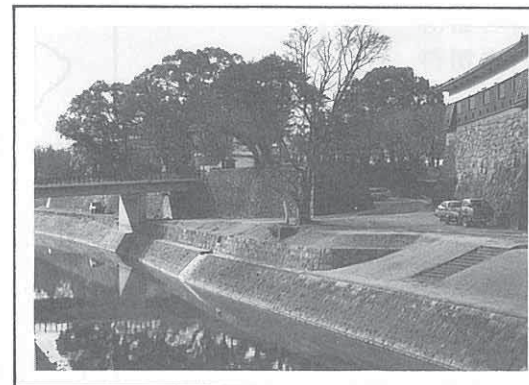
名 称	概 要
9 銃くれの伝説のある古井戸	天守閣に第6師団司令部が置かれ、歩兵13連隊の兵士が不審番に立っていたが、ある時週番士官がこの兵士の銃を月見台の井戸に投げ込んだことからこの兵士も井戸に入り自殺。のちに“銃くれ”と井戸の中から声がしたという。
10 不 開 門	城の東北、いわゆる鬼門に当るので、平常これを開けなかったところからついた名前であるが、城内の不浄を運び出す場合にだけ用いたので不浄門とも呼ばれた。
11 飯田丸五階櫓跡と大楠	飯田丸は、清正の重臣飯田角兵衛が守備を受け持った郭であり、西南の隅に五階櫓がそびえていた。西南の役の時に焼失した。築城以前の樹令およそ700～800年の老樹が残っている。
12 原 道 館 塾 跡	弘化2年(1845)林桜園の開いた塾の跡である。門下生には、宮部鼎蔵・河上彦斎らの勤王党、太田黒伴雄ら神風連の人々もいた。
13 千 葉 城 跡	菊池氏の一族である出田秀信が築城し、秀信の死後鹿子木親員(寂心)が入る。
14 塩 蔵 跡 と 藩 高 札 場 跡	高札場は西が新一丁目門前と東がここ十八間櫓下であり公示していた。この前には、塩蔵や煙硝蔵が立ち並んでいた。
15 棒 安 坂 と 棒 安 坂 事 件 (昭 和 16 年) 現 場 跡	下津棒安の屋敷脇にある急坂で、井戸が2つある。この一つで大東亜戦争直前、軍人に化けた犯人により妊婦殺人事件が起き市民を驚かせた。
16 下津棒庵屋敷跡後 陸軍幼年学校跡	加藤清正・忠広に仕えた政治顧問的重臣であった下津棒庵の屋敷があった。明治30年(1897)には、陸軍士官学校の予備校としての候補生を教育する陸軍幼年学校が置かれた。
17 新堀門と埋門	北からの入り口でもあるが薩摩藩としてはこの門が出入口であり、ここを出たら槍などを立てて行列を組んだ。

名 称	概 要
18 百間石垣と二の丸門跡	新堀門から二の丸に入ると南側に石垣が延々と続いている。百間以上長さがあるため百間石垣と言われている。百間石垣の西の二の丸門は堂々たる櫓門で、長岡監物の預かりであった。その中には、時習館・有吉邸・溝口邸・松井邸等並んでいた。
19 藩校時習館跡	細川重賢は宝暦4年(1754)二の丸に藩校時習館を起こし「東榭・西榭」を設置し、文武両道を奨励した。
20 西大手門	西向きになった熊本城にとって本丸の類当御門に至る重要な櫓門。なおこの櫓門は昭和56年に復原された。
21 有吉一日亭跡と神風連激戦地	一万石有吉家(細川藩大家老)の別邸一日亭があったところである。また、13連隊と神風連124人との間で激戦が行われたところでもある。
22 熊本洋学校跡	明治4年、実学党藩庁が藩の軍事的強化を目的に藩政革命、教育革命を実施し西洋の文物技術を移入するため、米人ジェーンズを招いて開設した。ジェーンズのキリスト教教育は、生徒の中に数十人の入信者を生み彼らは熊本バンドを結成した。
23 古城医学校跡	明治4年、再春館廃止後、県最初の西洋医学校でマンスフィールドを招いて開設した。明治8年私立となり下通りに移転する。マンスフィールドの教えを受けた者の中には、北里柴三郎・浜田玄達ら日本医学界を背負う人々がいた。
24 県庁跡	明治8年二本木よりこの地に移転して、同20年千反畑に移転した。(明治10年西南の役のために御船に一時移転された)
25 西南の役与倉中佐戦死の跡	西南戦争は、明治10年2月西郷隆盛の率いる鹿児島士族が起こした反政府暴動で西南の役ともいう。なかでも藤崎台西側の片岡邸付近の攻防は激烈を極め、13連隊長与倉中佐が戦死した。
26 新一丁目門と元標跡	幕府の法令を記し、掲げるための高札場が設けられた場所で「札の辻」と呼ばれた。またここは4街道の起点でもありここから各地への道程を計った。

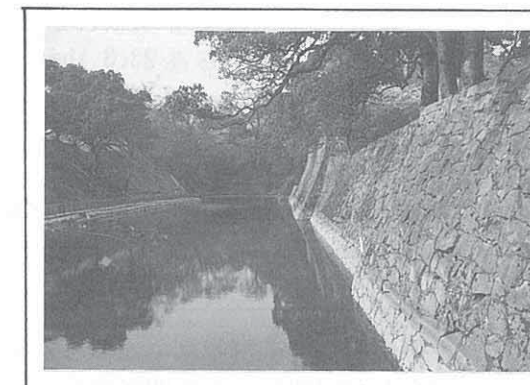
名 称	概 要
27 法華坂	清正入城の際、二の丸にあった三宝院(天台宗)に日真上人を呼び法華宗の寺とした。その寺が坂の上にあったことによる。
28 森本櫓跡	百間石垣の北側の段落ちの台地は豊前街道が通っているので、加藤氏時代には東に飯田覚兵衛を置き西に森本義太夫を置いて非常に備えさせた。西北隅に三階櫓が設けられ森本櫓と呼ばれた。明和7年(1770)の大火で焼失した。
29 平安の道(街道)跡	平安時代国府が飽田(二本木)に移ったあと、国府から北へ結ぶ官道であった。
30 藤崎宮跡	承平5年(935)藤崎八幡宮が勧請され、代々の国守に崇敬された。西南の役で焼け井川淵に移る。
31 西南の役の激戦地	段山は城攻防の最大の激戦地であり、一時薩摩軍が占拠し官軍が奪還しようとしてぶつかりあった。
32 藤崎宮の社叢林の天然記念物のクス群	藤崎宮のあった頃、境内には社叢林をなしていた楠の大木が7本も残っており、その中には樹齢1000年を超えるものもある。
33 太田黒伴雄終焉の地	維新後の新政府の政策は欧風を尊び敬神崇祖の念を失っているとして、明治9年10月24日午後8時神風連は太田黒伴雄を盟主とし鎮台を襲撃した。鎮台司令長官と県令等大数を死傷させたが、太田黒伴雄も戦死した。
34 第一勸業銀行熊本支店	昭和8年、やっと市街地中心部の近代化が進行しはじめたころのビルである。大正後期から、昭和初期にかけて鉄筋コンクリート造、銀行建築の好例である。正面に西洋の古典様式をもつ列柱を有している。
35 熊本市役所花畑別館(旧熊本貯金局)	近代建築運動を代表する山田守の設計で、昭和11年に完成した。タイル貼り壁、内部機能に応じた各種のガラス窓、丸みがつけられたコーナーの処理が特徴的である。なお4階部分は、昭和45年の増築である。

名 称	概 要
36 熊本市立博物館	科学館を併設した総合博物館であり、収蔵資料は地質・生物・理工科学・考古・歴史・民俗の分野にわたり、岩石・貝類・チョウ類などの三大コレクションも含まれる。併設のプラネタリウムは四季の星座を投影している。その他特別展（県・市科学展、肥後名花展等）館外活動（自然観察、史跡見学会等）月例会（友の会、星を見る会等）も行われている。建物は昭和53年、黒川紀章の設計による。
37 熊本県立美術館	昭和51年に総合美術館として開館された。特色の一つに装飾古墳室を設け、県内の著名な古墳を実物大のレプリカによって再現し、常設展示している。春秋2回の「永青文庫展」も開かれている。建物の配置は、既存の樹木をうまくとり入れ、熊本城を空間構成の重要な要素として取り入れている。前川国男の設計である。

下馬橋付近



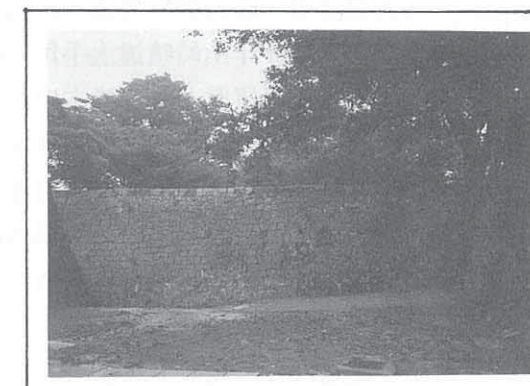
備前堀



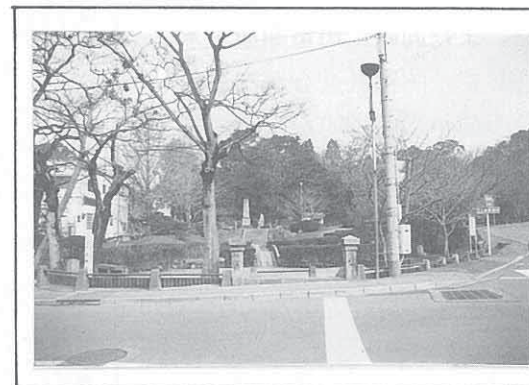
藩校時習館跡



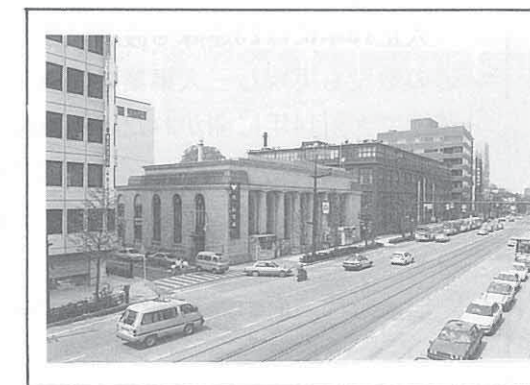
二の丸門跡



元標跡



第一勸業銀行と市役所花畑別館



(B) 山 崎

地区のデータ

地区構成	桜町 辛島町 練兵町 山崎町 慶徳堀 通町 紺屋今町
旧地名及び呼称	天神丁 山崎天神丁 山崎喰違丁 山崎本丁 山崎土手端 喰違丁 永丁 船場1丁目 通丁 山崎町
地区面積	23.3 ha
地区人口	S50 1,598 人 S60 1,555 人
地区人口密度	S60 48.7 人/ha
用途地域	商業地域 23.3 ha (100%)

地区の歴史

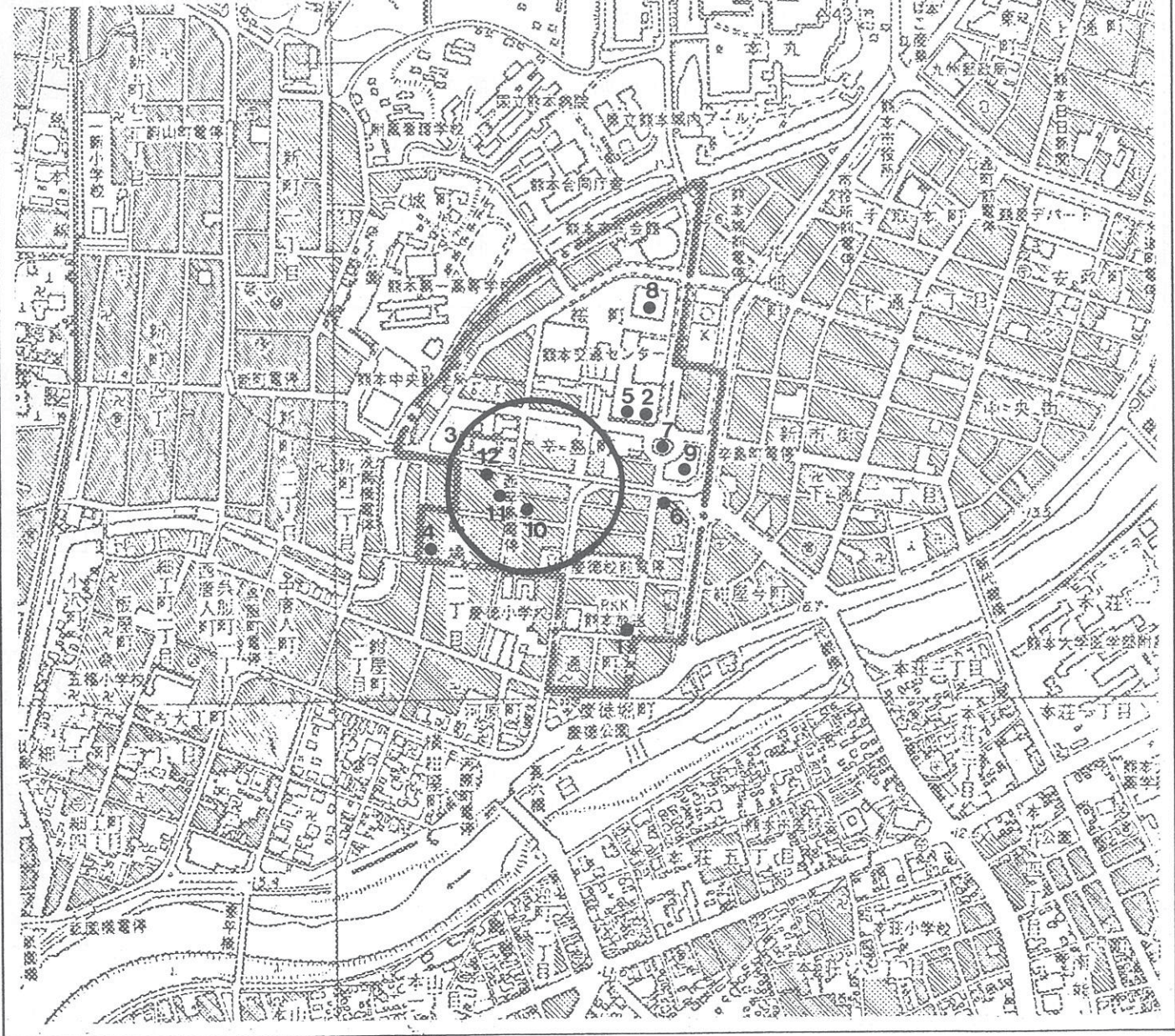
旧藩時代は上級の武家屋敷町であった。森鷗外の小説「阿部一族」で有名な阿部与一右衛門通信という武士の屋敷は寛永のころ山崎町の武家屋敷の一角（現在の熊本放送の位置）にあった。重賢のころ、二の丸に藩校・時習館、二本木に医学校・再春館が設立されたが、再春館は明和8年山崎喰違土手角に移転された。

明治4年廃藩置県となり熊本に鎮西鎮台が置かれると、初めは下馬橋の広場や隣の作事所跡を練兵場としていたが、西南の役後、山崎一帯の焼け跡を買収して、軍の練兵場が設けられた。明治33年辛島格市長のころに練兵場移転を始めた。しかし大恐慌があり難航したが、明治36年に至って、ようやく大江渡鹿に移転が完了した。跡地一帯は山崎新市街として整備され、明治41年に行幸町・天神町・桜町・花畑町・辛島町・練兵町と町名がつけられた。その後、荒地となっていた練兵場跡に、赤レンガの煙草専売局工場・熊本通信管理局・肥後相撲館・公会堂・商業会議所等が相次いで建てられた。

大正13年には23連隊も渡鹿に移転した。また同時に市電開通・水道の敷設も実現し三大事業の完成を記念して、国産共進会が23連隊跡地で大正14年に開かれた。その後市役所前から花畑町を南北に貫通する幹線道路が完成し、市営バスも運行し近代化は著しく進んだ。

煙草専売局工場跡地には県庁がおかれ（昭和25～42）、移転後は交通センターとなっている。

旧藩時代の面影は花畑公園の大楠を除き、現在ほとんど残っていない。



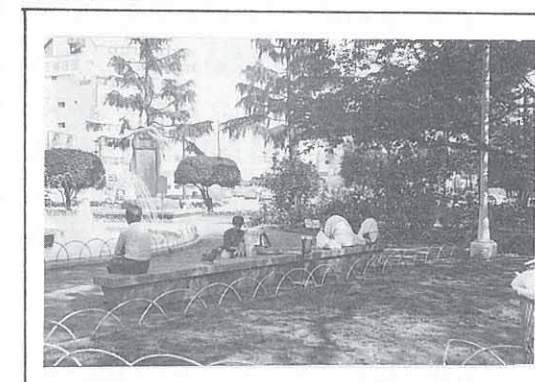
名 称	概 要
1 阿部一族屋敷跡	森鷗外の小説「阿部一族」の題材となった（細川忠利への殉死に伴う寛永20年の阿部一族の乱）阿部氏の屋敷跡である。
2 元田永 ^{なかさね} 学生誕地	文政元年（1818）に生まれた。元田家は代々奉行用人を務めていた。時習館で学び、横井小楠・長岡是容らと実学堂を興す。明治4年宮内省に出仕し、教育勅語の起草・発布に当たり、国教思想樹立に大きな役割を果たした。
3 山崎練兵場跡	旧陸軍練兵場である。西南の役後設置され明治33年には大江に移転が決まり同36年に移転した。
4 山城屋	清正が朝鮮役の際携帯食にしたといわれる朝鮮飴の老舗である。以前は土蔵造りであったが最近建て替えられた。
5 煙草専売局工場跡	明治44年、荒地となっていた練兵場跡に建った赤レンガの建物で近代熊本のシンボルとなった。
6 肥後相撲館跡	大正12年に建てられ、本館二階建八角形の建物であった。司家の地元としての誇りを高々と振りかざしたものであり繁華街である新市街の一つの目玉となった。
7 清正公銅像（ロータリー）	かつては日清戦争の戦勝記念碑があり、戦時中取り外され、後になって熊本城を背にした清正公座像が造られた。
8 NTT九州総支社（旧九州電気通信局）	歩行者を考慮して建物は隅切され、1階にはギャラリーを持つ。内部空間の合理的な計画性は高く評価されている。
9 辛島公園	山崎練兵場を大江渡鹿に移す際に力をつくした辛島格市長にちなんでつくられた公園である。街中の憩いの場である。
10 片岡外科医院跡	県下の新聞の発祥の地である。明治39年に宇土市にあった第135銀行の建物を移して社屋として九州実業新聞（日刊紙）を発行した。明治43年に九州新聞と改称した。現在、建物は残っていない。

名 称	概 要
11 大和座跡	明治41年創立で座主は古城卯三郎である。当時2劇場（東雲座・旭座）以外に劇場をつくることを禁じられていたが、県令を改定してつくられた劇場である。建物は、概ね博多の寿座をかたどり、大阪角座・中座の特徴を採用したものである。
12 後藤商店	大正9年に完成した。大正時代の華やかな装いがいきいきと残り、黒漆喰塗りの外装もどっしりと落ち着いたものである。昭和28年の水害で水につかったにもかかわらず今なお健在である。

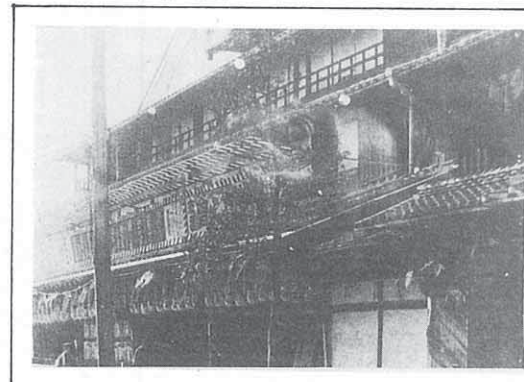
城と清正公銅像



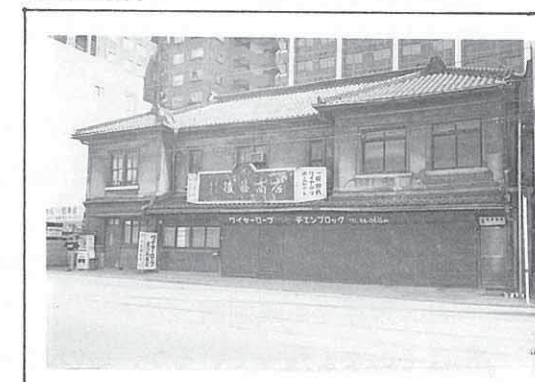
辛島公園



かつての大和座



後藤商店

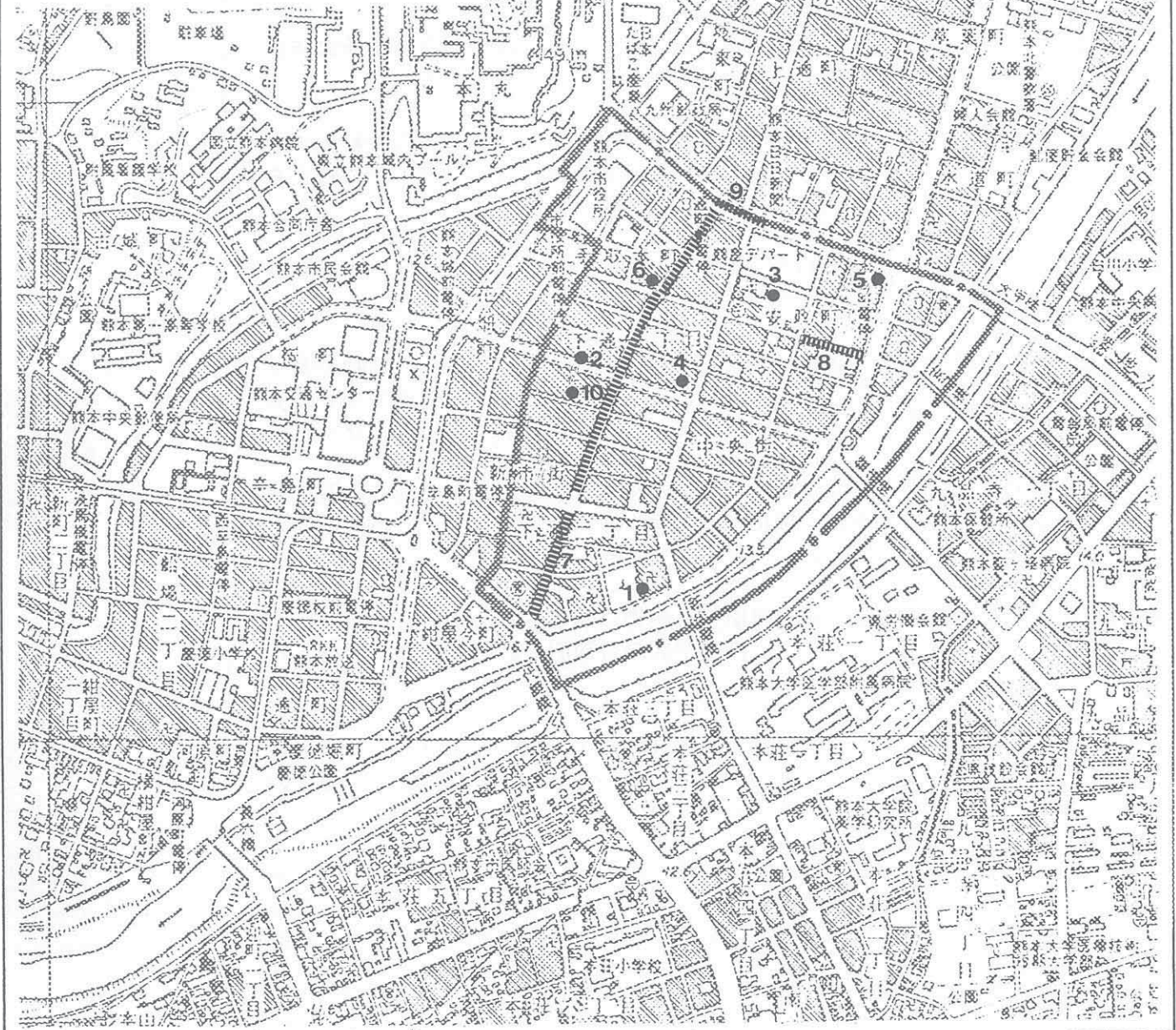


（熊日刊「図説熊本・わが街」より）

(C) 高田原

地区のデータ

地区構成	手取本町 安政町 中央街 下通1・2丁目 新市街▲
旧地名及び呼称	下通丁 相撲丁 昇丁 歩丁 千反丁 木戸組 鷹匠小路 楠丁 南裏丁 五十人組 下五十人組 宝町 中間小路 駕丁 声取坂
地区面積	34.1 ha
地区人口	S50 3,467 人 S60 2,173 人
地区人口密度	S60 53.8 人/ha
用途地域	商業地域 34.1 ha (100%)



地区の歴史

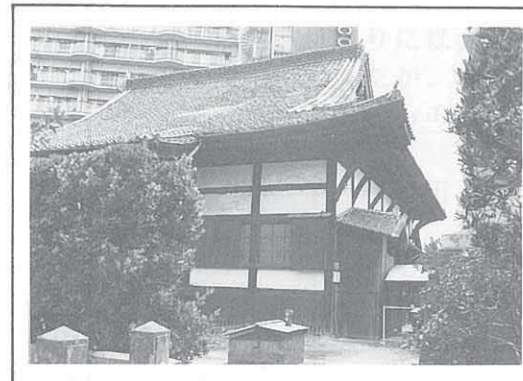
旧藩時代は、★切米取層の長屋などが立ち並んでいた地で、旧町名には独特な名称がつけられていた。五十人組町は、鉄砲組五十名の集団生活の町、駕町はお駕衆の町、相撲町は綱利が相撲屋敷を定めて毎日地取相撲のけいこを命じていた町である。また木戸組町は関所の守護役のいた町、昇町は参勤にお供をする槍持挟箱持達のいた町、歩町は御歩奉行があり同町一帯に足軽部屋が立ち並び隊伍を組んだ足軽の往来する姿がいつも見られた町といった具合である。

安巳橋は安政4年(1857)に新屋敷と城内をつなぐために架けられた橋であるため、安巳橋通りはそのころから往来があったのだろう。明治・大正のころ、このあたりでは上通り・安巳橋通・下通りの順に賑わっていた。大正14年には安巳橋通りに熊本ではじめての本格的なデパート「千徳」ができますます賑わいを増した。下通りは昭和20年の空襲で一面焼け野原になったが、復興に際して新しく街づくりが行われ、太洋デパートを中心に発展しつづけ今は上通りをしのぐ熊本一の繁華街となっている。下通り西側は、光琳寺町との間に廃川敷の低地が並行していたが、戦後埋め立てられ飲食店街に発展している。サンロード新市街は、明治36年に山崎練兵場が大江渡鹿に移転したあと造られた街であり、昭和の初め頃、大和座・旭座・朝日館・電気館等の劇場や映画館があり、娯楽場として賑わった。現在でも映画館・パチンコ屋が多い。下通りや安巳橋通りの形はそのまま残っているが、裏の道筋は旧藩時代の絵図の道筋とはかなり変わってしまった。

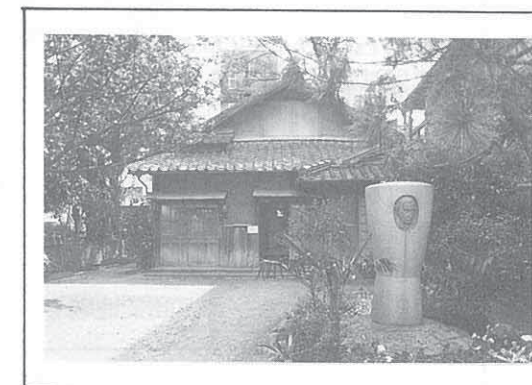
★切米取——切米(給与米)を受けとる武士

名 称	概 要
1 西 岸 寺	石田三成の重臣島左近泰岩和尚が住職を勤めた寺である。
2 夏目漱石の光琳寺町の旧居跡	漱石の第一の旧居跡で「涼しさや裏は鉦うつ光琳寺」の俳句を残している。
3 小泉八雲記念館 (市指定文化財)	ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は松江で節子夫人と結婚して、新婚の夫人を伴い明治24年来熊した。五高で教鞭をとったその最初の借家で、赤星典太氏(山口・長野・長崎・熊本各県知事を歴任)の旧居であった。
4 同 心 学 舎 跡	済々黉高等学校の前身で佐々友房らが創立した。
5 千 徳 百 貨 店 跡	大正14年欧米のデパート形式の熊本ではしりて八木デパートと共に大いに賑わった。コンクリート造5階建てであった。
6 太 洋 デ パ ー ト 跡	昭和48年11月29日、火災となり 227人の死傷者を出し、わが国デパート火災史上空前の大惨事となった百貨店である。現在はダイエー城屋となっている。
7 シ ャ ワ ー 通 り	新しいファッション通りである。下通りと続いているがアーケードがないため「シャワー通り」と言われるようになり、今では通り名として定着している。
8 三 年 坂	明治・大正の頃は安巳橋通りとして下通りよりも賑わっていたという。
9 通 町 筋	この通りから、ちょうど正面に天守を望むことができる。
10 下 通 り	上通りと並んで、市街地のメインの通りである。アーケードは巾 15m・高さ 10mで、九州一の大きさである。通りの中央では、各店からの売り物がでたり、展示会が行われたりする。

西岸寺



小泉八雲記念館

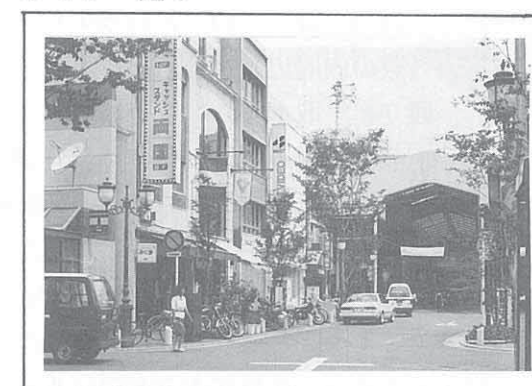


かつての千徳百貨店

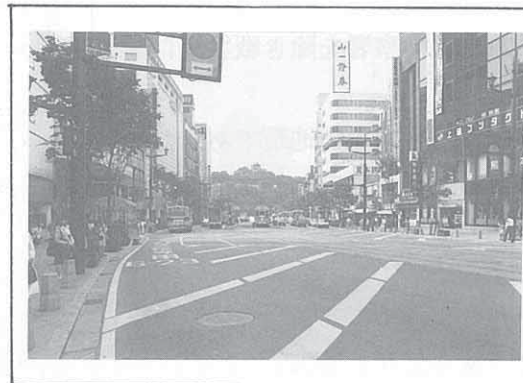


(熊日刊「図説熊本・わが街」より)

シャワー通り



通町筋



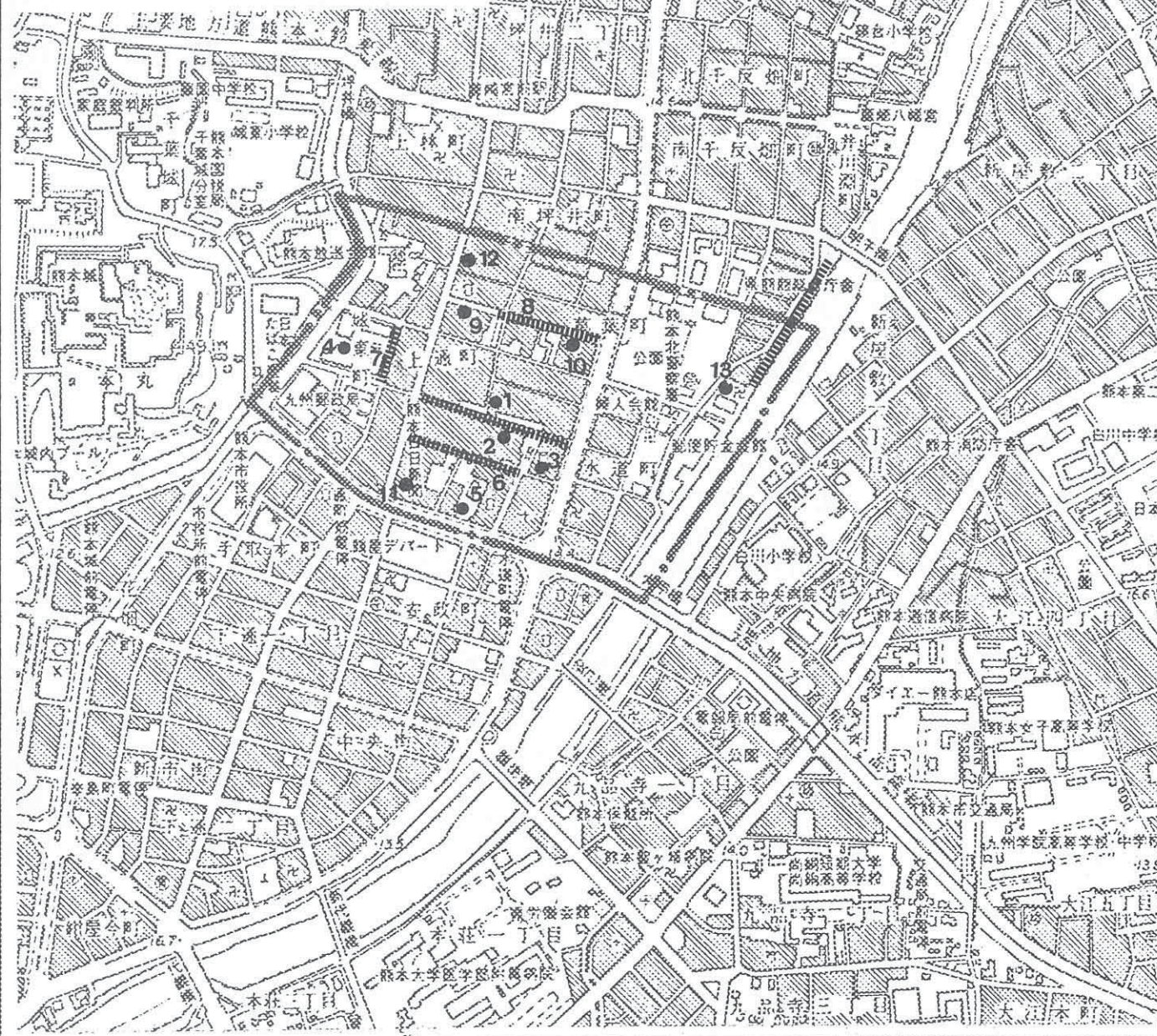
下通り



(D) 手 取

地区のデータ

地区構成	城東町 水道町 草葉町 上通町
旧名称及び呼称	上林 藪ノ内 通丁 上通丁 歩小路 坊主丁 小坊主丁 一本竹丁 桜井丁 長安寺丁 草葉丁 太鼓丁 長田丁 法念寺丁 地藏丁 願正寺丁 被分丁 明円寺丁 比丘尼丁 四軒丁 手取
地区面積	29.4 ha
地区人口	S50 2,375 人 S60 1,811 人
地区人口密度	S60 57.3 人/ha
用途地域	商業地域 29.4 ha (100%)



地区の歴史

旧藩時代は、上通りの両側は知行取屋敷が並び、通りから裏手や横丁に入ると切米取の小さな屋敷が並んでいた。

西南の役でこの一帯は焼失してしまった。役後は、文教の中心地（藪の内周辺）、公官庁の集中地（白川公園周辺）、商業地帯（上通り・手取本町）、交通の要地（水道町）として復興している。

藪の内周辺には、弘化2年（1845）千葉城の一角に林桜園の原道館（家塾）が設立されており、役後はその周辺に師範学校（明治11～26）、県立中学校（明治11～21）、県立医学校（明治11～21）、九州学院、高等女学校などが設立されていた。高等女学校の名残りが、オークス通りの大楠である。この一帯は現在郵政局、ホテルキャッスル、九州電力などのビル街になっている。

現在の白川公園周辺には、県庁、熊本警察署（明治22）、市役所（明治22～大正10）、県立図書館（明治28～昭和20）等の公官庁が集中している地区である。しかし、これらは警察署を除き戦災等により、昭和20年の終戦までには移転している。

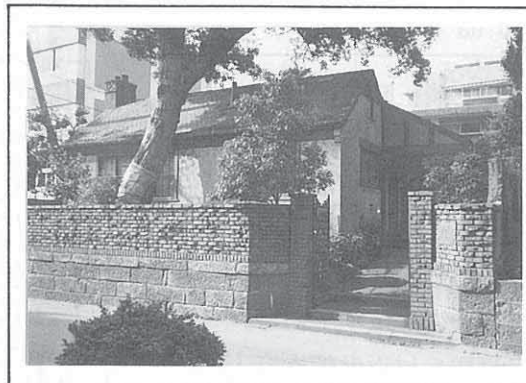
上通り（脇街道）の両側は町人町ではなく武家屋敷地帯であったが、城域内を通らないで城下町を通過する主要道路であったので、人の往来が多かったと考えられる。西南の役後は商店ができ、さらに市電開通後は手取本町と共にますます賑やかになっていった。上通りは昭和20年の空襲もまぬがれ古いたたずまいを残し、文教地区であったことを示す本屋・家具屋等は下通りよりも多い。

ちぎょうとり
★知行取——一定の領土を与えられた武士

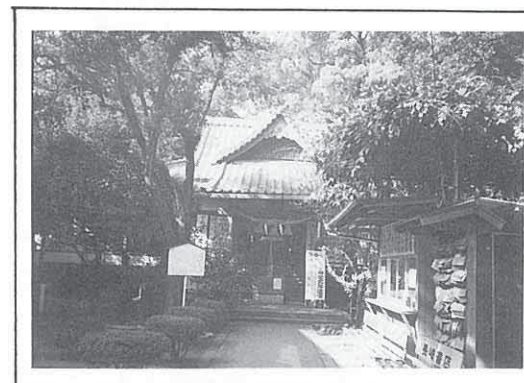
名 称	概 要
1 能 勢 邸	能勢弁護士宅は大正末期の建築（洋館）で、大木に彩られた町筋のアクセントである。
2 桜 井 戸 跡	加藤清正が城の周囲に設けさせた井戸の一つで手取神社境内の対の井戸であり、桜井町の起こりとなった。元1万石有吉家の下屋敷前にあったものである。
3 手 取 神 社	明治末、五高教員だったラフカディオ・ハーンが、よく散策に訪れたという。町中とは思えない静けさがある。
4 蕨ノ内文教碑	明治6・7年頃から大正・昭和にかけての文教の発祥地である。熊本ホテルキャッスルの一帯には師範学校・中学校・医学校・高等女学校などがおかれていた。
5 手取カトリック教会	明治22年創設された。長崎県を中心とした地域においての最初の鉄筋コンクリート造教会堂の一つとして、重要である。正面中央部には方形の鐘塔を設け、八角形のドームをのせている。
6 ファッションストリート	上通り横丁にならんだ輸入雑貨、蔵造りのブティックなどが新しい町を形づくっている。
7 オークス通り	元第一高等女学校の正門前の通りであり楠の並木が今も残っている。
8 草葉の広丁	大火の後、宝永4年（1707）防火地帯として道が広げられたが、今もその形が残っている。
9 アサヒ菓舗	明治時代からの店で、梅肉を使った“梅一輪”、県産の“小春柿”は老舗の風格を伝える名菓である。
10 日本キリスト教団 熊本草葉町教会	熊本大学木島研究室の基本設計で昭和63年11月に竣工した。コンクリート打放しの建物と微妙にずれた巨大な黄金の十字架が地面にどっしりと打ち立てられているのが印象的である。
11 熊日ギャラリー	昭和37年発足した熊本日日新聞社の貸・企画ギャラリーである。その後改築され、県内の作家を主とした作品展を催し、造形芸術の創造と鑑賞の場所として界限

名 称	概 要
12 舒文堂川島書店	創業は明治10年の西南の役後で今は4代目である。蕨の内・上林に学校が多く建てられたことにより、上通りには大正から昭和の初めには20軒もの古本屋があったが、今では3軒となっている。店の奥の居間は当時のものである。
13 法 念 寺	「吉田可智顕彰之碑」（熊本花菖蒲記念碑）が残っている。吉田可智は、細川斎護の要望に応じて菖翁のもとで花菖蒲栽培の秘訣を習い熊本で栽培を始めた。これが、肥後花菖蒲の始まりである。

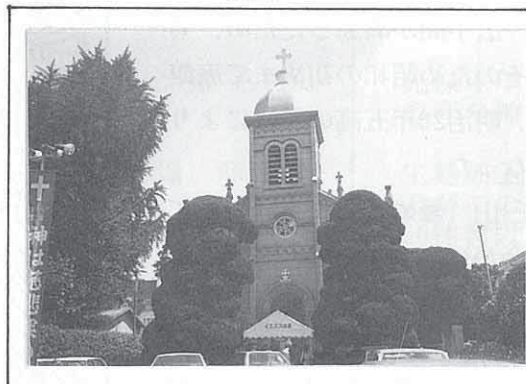
能勢邸



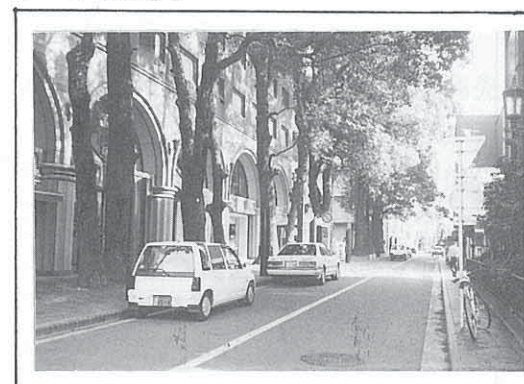
手取神社



手取カトリック教会



オークス通り



(E) 外坪井・千反畑

地区のデータ	地区構成	西子飼町 東子飼町 井川淵町 南坪井町 上林町 坪井 1▲・2・3▲丁目妙体寺町 南千反畑町▲ 北千反畑町	
	旧地名及び呼称	堀端町 横町 建町 魚屋町 弓丁 鳥町 長柄丁 鍛冶屋町 職人町 合羽丁 氷屋町 馬借町 裏鳥町 八百屋町 浄行寺丁 上林 六間町 六間丁 新町 妙体寺丁 太鼓丁 射場丁 鋤身崎 南覚丁 酢屋丁 松雲院丁 火焚丁 源空寺丁 葉師丁 子飼 内検丁 極楽寺丁 井川淵 千反畑 十人衆小路 兩人組 建丁 鐘木丁 木庭丁 井川町	
	地区面積	58.7 ha	
	地区人口	S50 9,275 人 S60 7,346 人	
	地区人口密度	S60 113.4 人/ha	
	用途地域	近隣商業地域 24.6 ha (41.9%) 商業地域 22.1 ha (37.6%) 住居地域 12.0 ha (20.5%)	



戦国時代までは坪井村の水田であったが、清正時代に埋立て本坪井の町家とした。それが整ったのは忠広のころである。幕末には拡張されて、周辺に武家屋敷も建ち並んでいた。江戸期は大火も多く、万治3年(1658)、寛政元年(1661)、寛文3年(1663)、元禄4年(1691)と記録がある。家が密集しているこの地域では、火災に弱く復興の際に防火地帯として道幅を広げたのが広丁である。竹辺との間は豊後街道であり、現在の赤鳥居の付近は熊本府入口の構口となっていた。立田口(旧藩時代は豊後街道の坪井管内を立田口といい立町本通りを示していた)は旧藩時代から交通の拠点であったが、大正の初めに菊池軌道の隈府～広丁間が開通したため、菊池方面の人々の出入りも多くなった。そのため昭和の初めまで旅館や食堂、商店が立ち並び賑わっていた。明治20年五高の設立により坪井から通丁にかけては、学生の町になった。

井川淵には西南の役後、藤崎宮が茶臼山(藤崎台)から移されている。毎年9月11日～9月15日に放生会が行われ、その例大祭は随兵祭り又はボシタ祭りとして市民に親しまれている。鳥居より入った北側には明治16年草葉町から移されてきた吉田司家がある。細川綱利が寛文元年(1661)吉田司家15代追風を京都より召しかかえ創立したもので、その後肥後の相撲は天下に喧伝することになる。

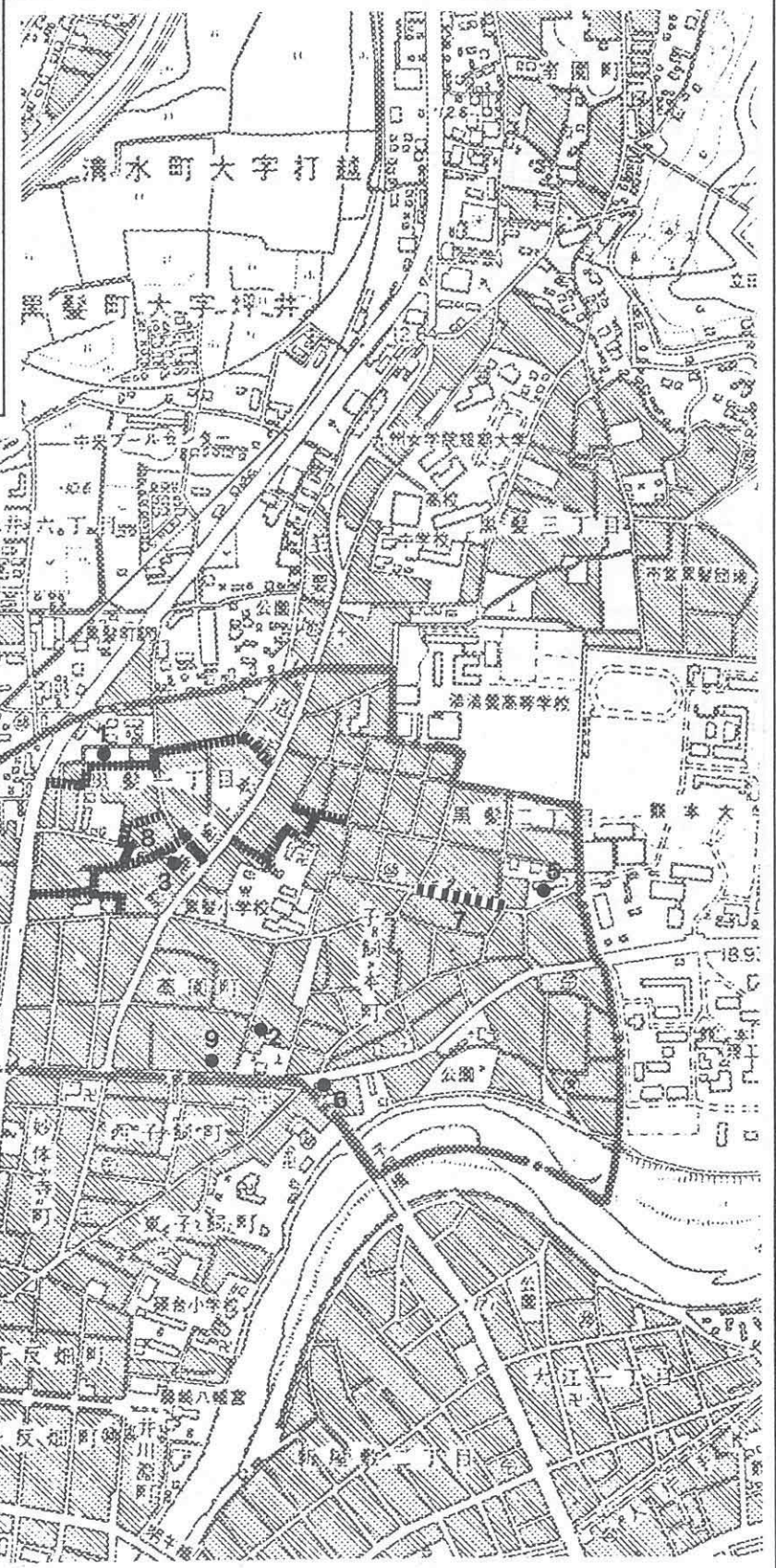
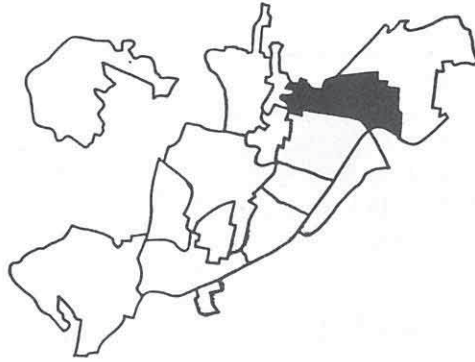
名 称	概 要
1 夏目漱石旧居	夏目漱石は第五高等学校の英語教師として明治29年4月から明治33年9月イギリス留学のため熊本を去るまでの4年5ヶ月間在熊した。その間6回引越しをし、その内の3軒である。下記の句を残している。 A 第2旧居跡 ^{かつば} 合羽町の家 「名月や十三円の家に住む」 B 第4旧居跡 井川淵の家 「颯と打つ夜網の音や春の川」 C 第6旧居 北千反畑町の家 「菜の花の隣ありけり竹の垣」
2 山本屋食堂	明治の初め“一杯めしや”として創業して、現在のご主人は5代目である。馬肉の肉井やさばの煮付は創業以来のものである。厨房部分は明治10年建築のものが残っている。他は昭和元年の建築である。
3 壺之倉庫	建物は山鹿に建てられた造り酒屋の仕込み倉であった。大正3年からは鹿本製紙工場の倉庫として使われていた。移築し、壁等を改装してビアレストランとなっている。アンティークの机や椅子も輸入品を使い和洋の調和がとれている。
4 赤煉瓦	明治時代の煉瓦造の水室を改造して作った洋風レストランである。
5 吉田司家	吉田家は代々朝廷の行司官を勤めていたが、後に細川綱利に仕え熊本に住むようになった。高田原に相撲屋敷を定め毎日地取相撲のけいこをしていた。これが相撲組の設置である。草葉町の一角から明治16年現地に移転した。数々の相撲関係資料も展示されている。
6 園田屋	清正も文禄の役で食べたという朝鮮飴の老舗として知られている。
7 報恩禅寺	この寺には、千体の観音像が安置されていたため通称「千躰仏」と呼ばれている。放浪の俳人種田山頭火はこの寺で出家した。
8 藤崎八幡宮	もとは藤崎台にあったが、西南の役で焼失した後この地に移転した。肥後の鎮護の宮である。藤崎宮大祭は、「随兵」や「ボシタ」と言って熊本最大の祭りである。
9 浄行寺	清正が町割をした頃から古坪井の一角にあり浄行寺の地名の起りとなる。
10 忍法寺 (三角寺)	大賑わいの子飼商店街(鋤身崎)の南西の入り口にあり三角形の敷地であることから三角寺と呼ばれている。

名 称	概 要
11 春松閣	細川刑部家の屋敷が残る。刑部家は細川忠興の五男興孝で上屋敷は、熊本城二の丸にあったが延宝6年(1678)二代興之の妻の別荘として造られ、後刑部家の下屋敷春松閣となった。
12 松雲院	立田口の六道辻の脇の寺として、城下町の備えの寺である。八代の松井家の菩提寺であり、松井家ゆかりの人々の墓がある。
13 正福寺	細川家の安全祈願のために建てられた寺で、古い町並を残す坪井の仁王さんとして親しまれる。山門に2体の大仁王像が立っている。
14 堅山南風生誕地	日光輪王寺の天井に有名な鳴竜図の復原制作をした日本画家・堅山南風が、明治20年に生れた地である。
15 小泉八雲旧居跡	来熊して一年後手取本町からここへ移る。長男が生まれたこともあって、大変気に入っていたようである。『知られぬ日本の面影』を執筆した。
16 島田 まんじゅう店	店先のせいろの湯気が目印の手づくりまんじゅう屋である。人気のある黒砂糖のまんじゅうは、注文しておかないと買えない。
17 千反畑広丁	元禄4年の大火の後、防火地帯として道が広げられ、その線形は今もよく残っている。
18 白川右岸緑地	(通称)鶴田公園と呼ばれている。市民が愛情を込めて作ったりバーサイドパークである。
19 延命山地蔵院	通称「どんがん地蔵」と呼ばれている。御堂の前に太鼓とかねが下げてありポーブラ(かぼちゃ)をお供えして地蔵院のポーブラポーブラと言いながらたたく。7月6・7日の祭りの時地獄・極楽5つの絵が展示される。
20 恵比須さん	元禄4年大火のあと広丁の空地に祀られた。商売繁盛の守り神として10月20日にえびす市が立つ。
21 古場商店	生麩細工・豆腐細工の店で細川公とともに肥後に来たのがこの家の先祖である。生麩の細工物は実に美しく20種類以上もあり頼めばどんなものでも作ってくれる。代表的なものは仏事に使う蓮と慶事に使う手まりである。
22 子飼商店街	第二次大戦後、魚・野菜をはじめ各種商品を並べた店で賑わい、現在でも定評のある安さと庶民的な雰囲気です市民に親しまれている。

(F) 竹 辺

地区のデータ

地区構成	黒髪1・2 [▲] 丁目 子飼本町 薬園町 坪井町1・3・4・5丁目 [▲]	
旧地名 及び呼称	材木丁 小姓小路 産打丁 紺屋町 七軒丁 建町 峯雲院前通 七曲り 建部ムラ 横町 上三軒丁 下三軒丁 薬園丁 三間町東丁 出屋敷 小松原野口 三天堂 小松原 建部新屋敷 久本寺横丁 立田口 五十人組	
地区面積	61.5	ha
地区人口	S50	13,121 人
	S60	10,753 人
地区人口密度	S60	77.3 人/ha
用途地域	住居地域	30.3 ha (49.2%)
	近隣商業地域	17.4 ha (28.3%)
	第二種住居専用地域	13.8 ha (22.5%)



地区の歴史

この地は細川忠利入国後、寛永以後の拡張部分である。
 この地域は、西南の役や昭和20年の空襲にも遭っていないために古い屋敷が残っている。矢竹の塀、曲り家、茅葺屋根の武家屋敷が見られる。市立高等学校付近に「七曲り」と呼ばれて、通りが何回もかぎ型に曲がり行き止まりになっている路地がある。大津街道（豊後街道）を経て肥後藩の情勢を探ろうと入ってくる幕府や他国の隠密をこの迷路に追い込んで召し捕らえるために設けられたという話もある。市立高校の敷地の大部分は、旧藩時代の家老米田家の所有で「採釣園」と呼ばれる別荘のあったところである。その中には、米田家家臣の子弟を教育する「必由堂」と称する学問所があり、井上毅も少年時代学んだという。
 宝暦6年重賢の時代、藩の医学校である再春館が開設された。薬物の研究と製造にあたるため、同8年現在の薬園町に蕃滋園が設けられた。この薬園は廃藩置県後廃止となり、植物は五高の植物園に移植され現在も少し残っている。三軒町は菊池往還の入口にあり、菊池米をはじめとする物資の搬入地として早くから商家が発達していた。明治期には酒・醤油・味噌・そうめん・紙・畳・紋油などの農産加工業も発達した。

名 称	概 要
1 笠 邸	茅葺の武家屋敷で、隠密かくしと呼ばれた七曲りの路地中に現存する。
2 九 本 寺	豊前街道守りの寺で、延宝8年に立田口構の脇に造られた。
3 椋 天 神	戦いに赴いたまま帰らぬ夫を尋ね歩いたが巡り合えず、遂に精魂尽き果ててこの天神の境内で自害したという「飽田姫の悲しい物語」が伝わるところである。
4 宗 心 寺	坪井の仁王さんと並んでエンマさんの愛称で呼ばれる。
5 旧五高花陵会	昭和初期に日本Y M C Aが学生クリスチャンのために建てた建物。
6 六 道 辻	このあたりは細川時代拡大された地で、豊後街道、子飼の渡し場への道、鋤身崎の斜めの道等、交通の要衝であった。
7 小松原の広木	現在、黒髪幼愛園前の広い通りにあたり、桜並木の馬場があったところである。かつてはその前に榎本家など旧武士の家と門が建っていた。
8 七 曲 り	複雑な路地のため、隠密隠しの道とも言われている。現在は3号線のため一部しか残っていない。
9 蕃 滋 園 跡 ばんじえん	宝暦6年(1756)、細川重賢がつくった薬草園である。藩には7ヶ所の薬園があり、蕃滋園はその中央薬園であった。当初の規模は500坪であったが、天明年間には1485坪余にもなり隆盛をみた。明治になり廃藩置県で廃園になったが現在でも熊本大学薬学部植物園に4種類残っている。現在の薬園町の名のおこりとなった。
10 採 釣 園 跡	寛文10年(1670)家老長岡家(米田家)の下屋敷の跡である。

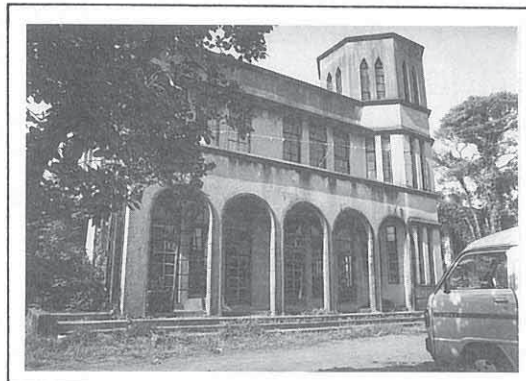
笠邸



宗心寺



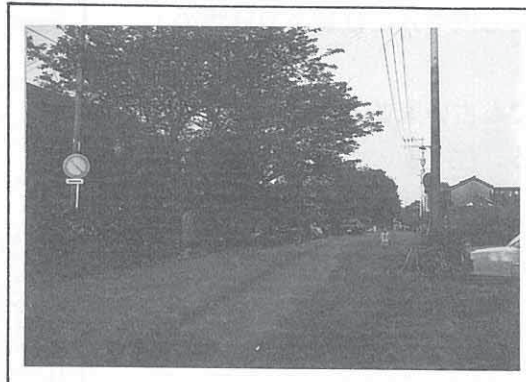
旧五高花陵会



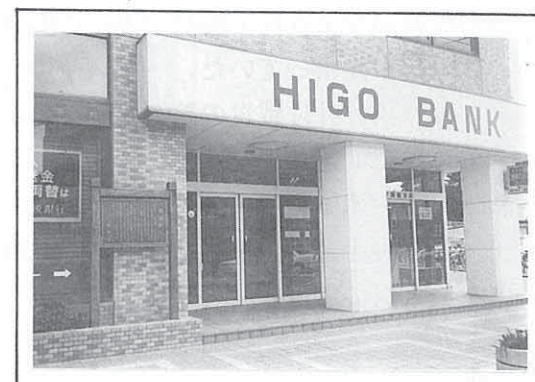
六道辻



小松原の広木



蕃滋園跡



(G) 内坪井

地区のデータ

地区構成	内坪井▲ 千葉城町▲ 坪井1丁目▲
旧地名及び呼称	内坪井本丁 坪井 折梅壇
地区面積	21.0 ha
地区人口	S50 2,929 人 S60 2,185 人
地区人口密度	S60 68.1 人/ha
用途地域	住居地域 16.5 ha (78.6%) 近隣商業地域 4.5 ha (21.4%)



地区の歴史

加藤清正入国以後、旧坪井川と坪井川の古河道を利用した水堀である坪井堀や土手に囲まれているために、内坪井と呼ばれている。全域中級武士の屋敷が連なった「侍町」であり、通り抜けできない通りが多い。坪井堀は防衛上のものであり、堀東側は商工業の町で賑わっていた。また豊後街道の通過地点である現壺川小学校の通りから外坪井への堀の切れ目には門と番所が設けられていた。

坪井川は頻繁に氾濫を起こし、寛政8年(1796)には屋根まで水がきたという記録がある。明治以後も、大きいものだけで明治33年、大正12年、昭和28年、32年と続いた。流長院に残っている九重石塔は古くから洪水時の水深の目安にされてきたということである。

明治24年には鉄道開通にともなって、池田ステーション(現上熊本駅)から坪井への新坂が新しくできた。

その後内坪井には、土族授産のため明治29年2月肥後製糸(株)(職工 105名)、6月には熊本織物力食社(株)(職工 115名)と相次いで大きな工場ができ、このほかにも内坪井には製糸や織物の工場が集まっていた。

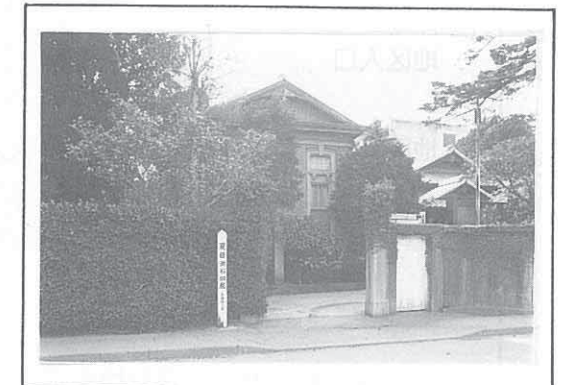
内坪井は戦災の被害も少なく、今でも古い家並みが残っている。また商店も少なく静かな住宅街である。住宅街の中に、藩校・時習館の木下華村が最初に建てた木下塾、宮部鼎藏や小泉八雲の旧居跡、横井小楠、佐々友房、宇野東風等の生誕地等、史跡が多いのもこの地区の特徴である。

名 称	概 要
1 佐々友房邸跡	安政元年（1854）ここで生まれた。時習館に学び、西南戦争では熊本隊として西郷隆盛が率いる薩軍側についた。高田原に同心学舎（今の済々黉高校の前身）を創立後、代議士として国政に参与した。
2 夏目漱石旧居 （市指定文化財）	来熊して5番目の家。6つの家の中で一番長く、小説『二百十日』の素材となった阿蘇行きもこの家にいたときのことである。ここで長女も生まれ産湯を汲んだ井戸も残っている。
3 横井小楠生誕地	文化6年（1809）今の中央女子高校のところに生まれた。富国強兵・開国などを唱え、明治維新に活躍し制度局判事となったが暗殺された。肥後実学派の指導者である。
4 宮部鼎蔵旧居跡	山鹿流兵学師範である。原道館 ^{おうえん} で林桜園から古典・国学を学んだ。肥後藩の勤皇志士として活躍したが京都三條小橋の池田屋で新撰組に襲われ命を落とす。
5 庚申橋	この橋付近では近くの染め物屋が、染めた布を洗っていたという。
6 空壺橋	坪井の旧武家屋敷から城もとへの連絡橋で古い町割りのまま残る。
7 明篤橋	
8 六工橋	熊本鎮台の第6工兵隊が架けたのでこの名がついた。城内への渡り橋である。
9 旧坪井川支流	昔の堀の線形をそのまま残し小学校の反対側は竹がうっそうと茂っている。
10 旧古坪井の町並み・道	侍小路の通りは道巾も狭く入り組んでいるため静かな雰囲気がある。

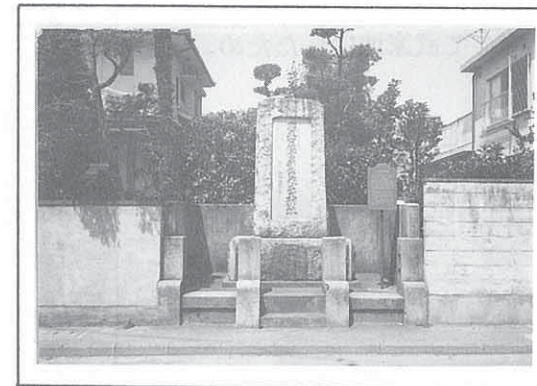
佐々友房邸跡



夏目漱石旧居



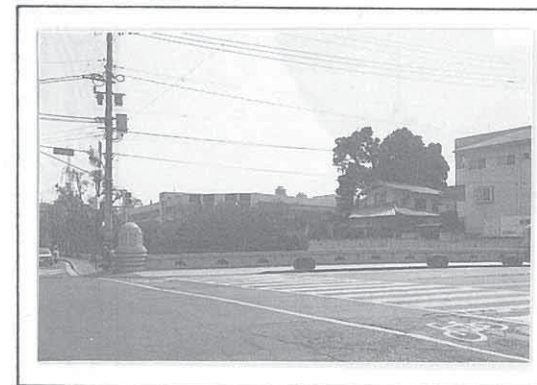
宮部鼎蔵旧居跡



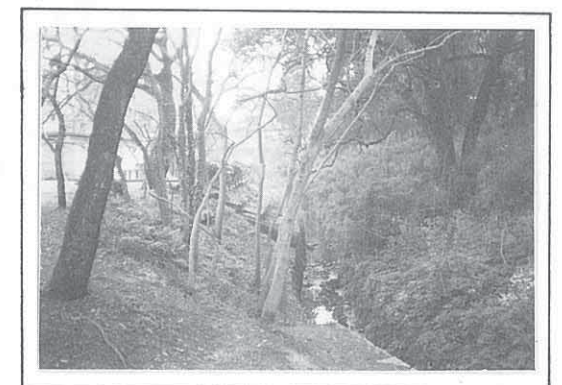
空壺橋



坪井橋から熊本城を望む



旧坪井川



(H) 寺原

地区のデータ

地区構成	壺川1・2丁目	
旧地名及び呼称	寿勝寺丁 中ノ丁 家鴨丁 寺原大工町	
地区面積	14.1 ha	
地区人口	S50	2,238 人
	S60	1,891 人
地区人口密度	S60	67.3 人/ha
用途地域	住居地域	8.8 ha (62.3%)
	第二種住居専用地域	5.0 ha (35.3%)
	近隣商業地域	0.3 ha (2.4%)

地区の歴史

坪井川右岸から京町台地東端に至る地帯であり、全体に台地から川に向かってゆるい傾斜となっている。

昔、静国寺という大きな寺があり、境内には大きな池があった。慶長年間に静国寺を移し、池を埋め立てて武家地にしたため、この地帯は寺原と呼ばれた。

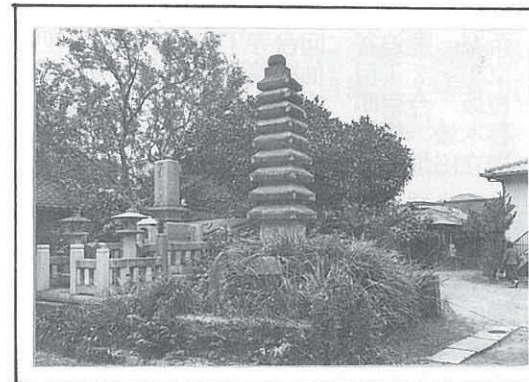
また、家鴨丁という通称名があったが、池に鴨が放し飼いにされていたため名付けられたという。旧藩時代には寺原から京町には中坂と瀬戸坂かしかかった。

この地帯は標高約10^m内外で低いため、しばしば坪井川の氾濫によって水害を受けてきた。



名 称	概 要
1 故米光太平さんの自宅	肥後象嵌の国の重要無形文化財（人間国宝）であった。加藤時代から続く金象嵌の技法を現代に伝えた。自宅の奥では、太平さんのお弟子さん達によって制作が続けられている。
2 流 長 院	慶長5年開山される。境内には加藤氏の家臣福島豊前、出田武房らの墓があり、九重石塔は洪水の際の水深の目安にされてきたという。

流長院の九重の石塔



肥後象嵌の刀の鐔—米光太平作
 (熊日刊「熊本県大百科事典」より)

(I) 京町・出京町

地区のデータ	地区構成	京町本町 京町1・2丁目 出町▲ 池田1丁目▲
	旧地名及び呼称	新堀 龍迫谷 向台寺丁 西方寺丁 四軒丁 京1・2丁目 仙勝院丁 観音丁 金峰山町 榎坂 今京町 中坂 龍崩 宇土小路 瀬戸坂 春木坂 釈正寺坂 京町本丁 柳川丁 新屋敷 岩立田畑 赤尾 白髪丁 出京町 新出京町
	地区面積	63.4 ha
	地区人口	S50 8,597 人 S60 7,728 人
	地区人口密度	S60 78.2 人/ha
	用途地域	住居地域 47.0 ha (74.2 %) 近隣商業地域 9.6 ha (15.1 %) 第二種住居専用地域 6.8 ha (10.7 %)

地区の歴史

豊前街道の守りを固めるため、京町の北端には番所があり、検門は厳しいものであった。その南は兵だまりであり、構口の外は外堀と土居で二重に防護するようになっていた。

京町とは都の意味で加藤清正が茶臼山（現在の古京町付近）にあった町家を移したものであり、南北に走る街道に沿って京町1～2丁目、2丁目筋の西に今京町・金峰山町の町人町が形成された。

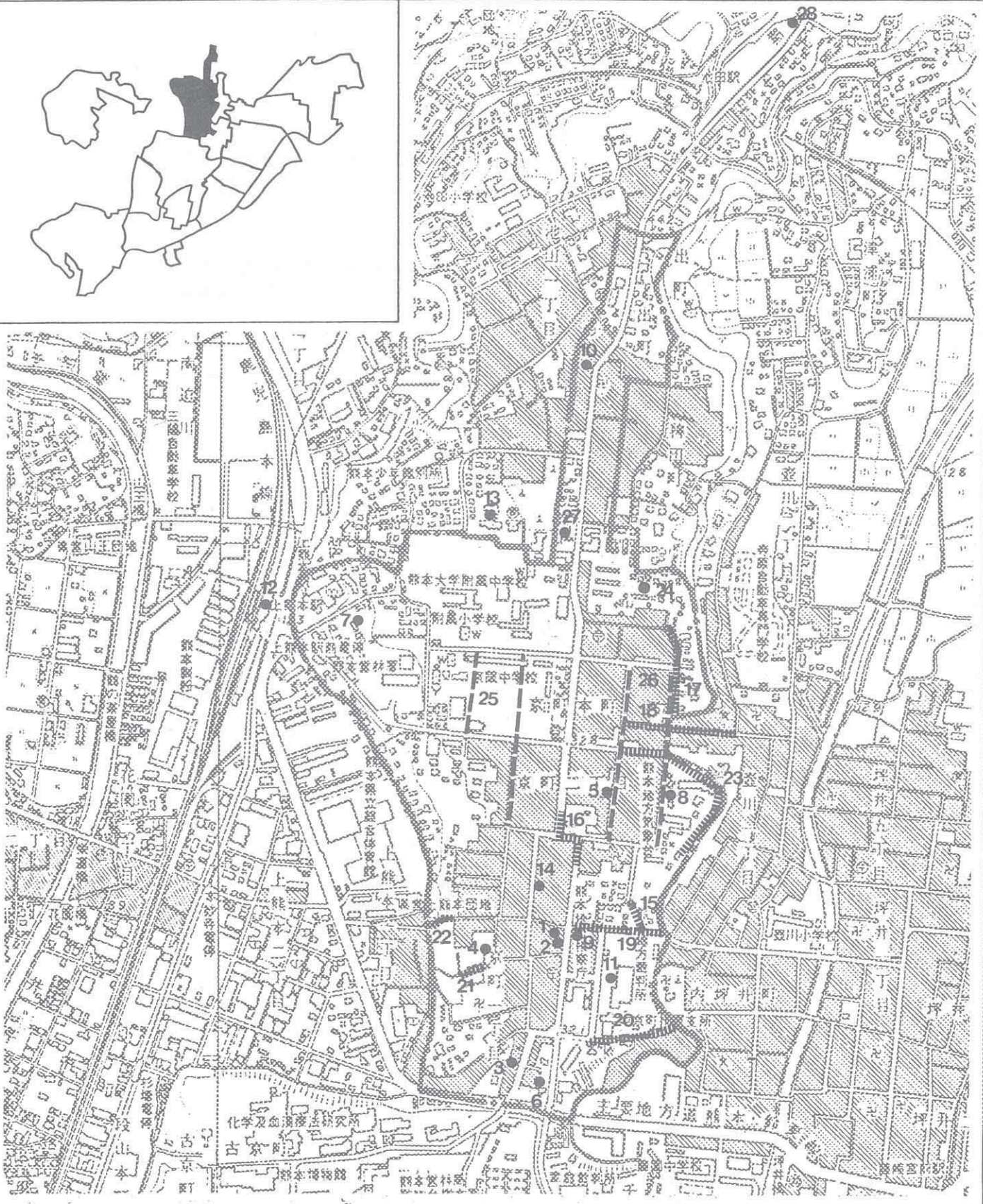
この地区は、城下町の人々の集まる繁華街であって、今京町は、芝居や寄席・料理屋などが立ち並んだ賑やかな場所であった。京町台は火事が少なかった。これは高台であり水は貴重であったため、火災には特に注意したということである。また町の裏通りには、柳川小路・宇土小路と呼ばれる武家地も存在した。

明治になって、裁判所（明治11）・熊本大林区署（明治20）・測候所（地方气象台・明治23）など各種役所が建てられた。

京町には台地であるために坂が多い。内坪井へ下る急勾配の観音坂があり、平行して中坂がある。明治24年に新坂ができる前までは、雁木坂と結んで本妙寺参道への内坪井からの唯一の通路であり、頓写会の夜には賑わった。明治5～8年頃の「白川県肥後国熊本全図」には全ての坂の名称が記されており貴重な資料である。

京町から北側に新しく形成された出京町は、すでに細川忠利入国以前に形成されていた。出京町は俵物屋・鍛冶屋・紺屋・馬具屋・蹄鉄屋などあり城下町の出入口らしい町並みであった。

新出町は正徳元年頃（1711）から出小屋ができ始め、寛政元年（1789）に町名がついたという。



名 称	概 要
1 池田屋 マルイケ醤油	寛政年間の創業である。1階は改装されているものの土蔵造りの建物は残り玄関先の看板が目印である。
2 坂本米店	陸軍御用達の米穀商であった。黒漆喰の建物が今も残る。
3 愛染院	真言宗のお寺で細川忠利の創立である。山門の内側に放牛地藏（放牛が彫った石仏 107体の15体目）がある。
4 西方寺	古くからあった寺で天正5年に浄土宗の寺として開かれたことが記録されている。山門・薬師堂・観音堂等は西南の役で焼失した。イチョウの木の前にはお地藏さんが数多くある。
5 木下韓村塾跡	「師聖」と呼ばれた韓村は時習館から江戸の昌平齋で学んだ。帰熊して時習館訓導をしながら最初は内坪井で、後にここで塾を開く。門人には井上毅・木村弦雄等がいる。
6 錦山社跡 （加藤神社）	明治7年に本丸一帯が、陸軍用地となったとき天守の西からこの地（錦山）に移された。昭和37年国道3号線の開通のため再び城内（現在地）に移った。
7 赤尾丸跡	清正の代までは熊本城の北方外城とされたが細川時代になって廃城、のち赤尾茶屋が置かれ藩主の北方巡視の際の休憩所にあてられたという。
8 与倉中佐邸跡	西南戦争の際の熊本鎮台主力の13連隊長・与倉知実中佐が居住したところ。
9 二宮菓舗	手づくりの和菓子屋で中坂の下り口にある。創業以来、形変わらず作られている「藤娘」は洋風の和菓子である。
10 酒本鍛冶屋	慶長3年に刀鍛冶として創業した。その後農機具の鎌や鋤・包丁造りへと移ったが、約400年におよぶ伝統の職人技は今も変わらない。
11 裁 判 所	明治11年に古城からこの地に移り、明治41年に赤煉瓦の建物に改築され今も本館の玄関部分を残している。

名 称	概 要
12 上 熊 本 駅	明治41年に改名されるまでは池田ステーションと呼ばれていた。ハーンの『停車場にて』の名作を生んだのをはじめ、夏目漱石・寺田寅彦ら明治を代表する作家が熊本への第一歩を記したところである。
13 光 永 寺	西南の役の時の弾痕がある寺で、放牛の署名刻印のある臼がある。
14 草 分 天 神	清正が熊本城を築く時、京町村木の下というところから天守の柱を切り出した時、その木の根元から現われた天神像が祀ってあるといわれる。
15 春 木 坂	中坂の中程の、石地藏の座す専念寺の門前から北に上る石段のことである。町奉行の春木主税が屋敷をさいて作った道で主税坂とも呼ばれた。
16 牛くびり坂	豊前街道のクランク部分の坂である。坂の先は現在气象台で行きどまりとなっているが、昔はここから下がって寺原へ行く坂があったといわれている。名の由来は不明である。
17 旧 瀬 戸 坂	京町柳川バス停から北へ石の階段を下り、そのまま元白髭丁へ上がる坂のことである。旧瀬戸坂と東西に交差するのは瀬戸坂である。
18 瀬 戸 坂	寺原の大工町（壺川1丁目）へ抜ける急な坂で昔は人気もなく女子供は怖がって通らないほどだったという。
19 中 坂	豊後街道の道筋で参勤交代の時、新堀門を出て坪井に下る際には、この中坂か観音坂を下りたという。
20 観 音 坂	白々と拘置所の塀がそびえる急勾配の坂で、豊後街道が抜けた坂である。
21 西 方 寺 の 坂	この付近は竹が多く、しっとりとした界限である。少し急な坂であるが夏の暑さも忘れる。
22 雁 木 坂	新坂が出来る前までは、中坂と結んで内坪井からの唯一の東西の通路であった、石段の坂である。

名 称	概 要
23 新 坂	漱石が池田ステーションに着き、この坂を人力車に揺られながら熊本の町を『森の都』とって眺めたといわれる。この坂は駅開設とともにつくられた。
24 加藤時代の京町の空堀	ちょうど京町と出町の境にあたる。北口の守りを固めるための空堀のあとが今も残っている。
25 宇土小路跡	関ヶ原の戦いで敗れた宇土の領主小西行長の旧臣たちを召しかかえ、この地域に住ませたので宇土小路の名が付いた。
26 柳川小路	関ヶ原の戦いで敗れた柳川城主立花宗茂は、加藤清正に家臣達の扶養を依頼した。200人もの柳川衆をこの地域に住ませたので柳川小路の名がついた。その後元和6年(1620)宗茂は柳川城主に復帰し、柳川衆は全員帰参したが地名はそのまま残った。
27 住 生 院	安貞2年(1228)に白川のほとりに開かれたといわれるが、これは大江1丁目であるとの説が有力視されている。その後廃絶に近い状態になったが、慶長7年(1602)加藤清正時代に古鍛冶屋町に再興のち、享保9年(1724)現在地に移建された。放牛地藏の100体目が安置されている。
28 やんぼしつか山 伏 塚	かつて大榎がありその根本に一基の板碑がまきこまれていて、これを山伏塚と呼んでいた。伝承では「加藤清正が築城のとき地割の法を行うために呼んだ龍蔵院という修験者を秘密が洩れぬようにと、ここで殺して埋葬した」とされている。

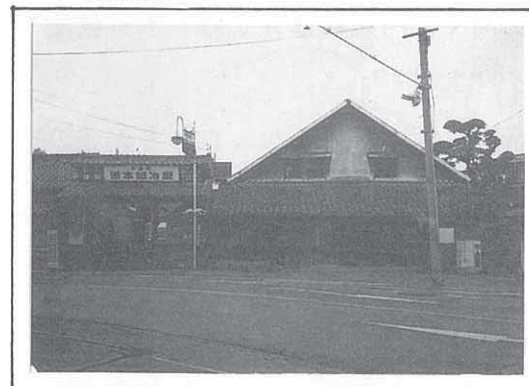
坂本米店



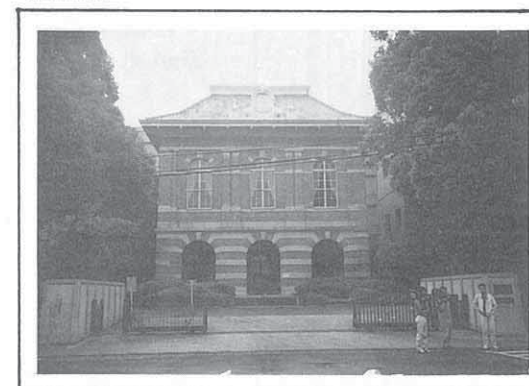
愛染院



酒本鍛冶屋



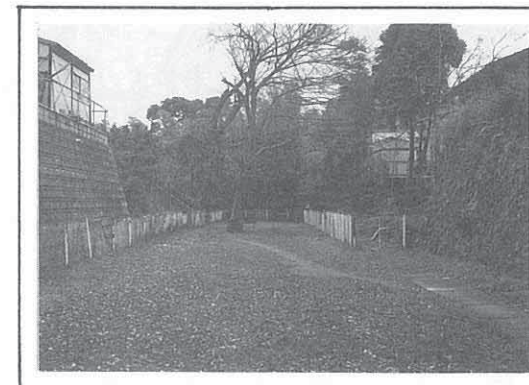
裁判所



草分天神

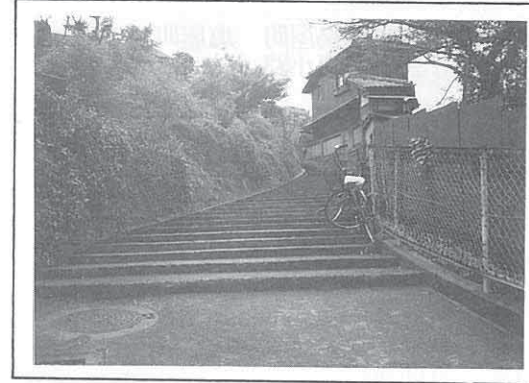


京町の空堀 (京町台公園)



坂の風景

春木坂



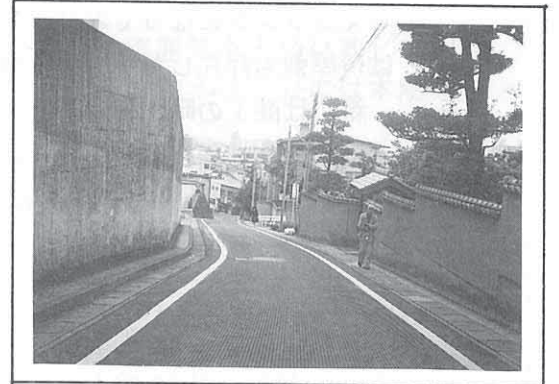
瀬戸坂



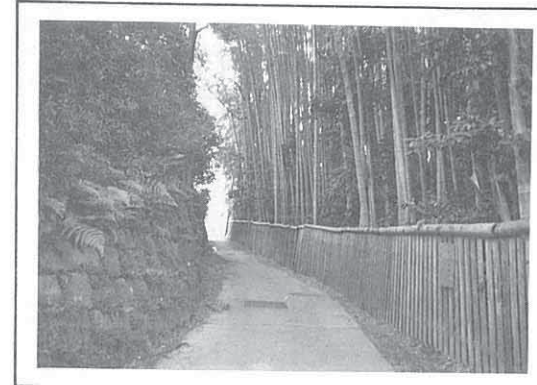
中坂



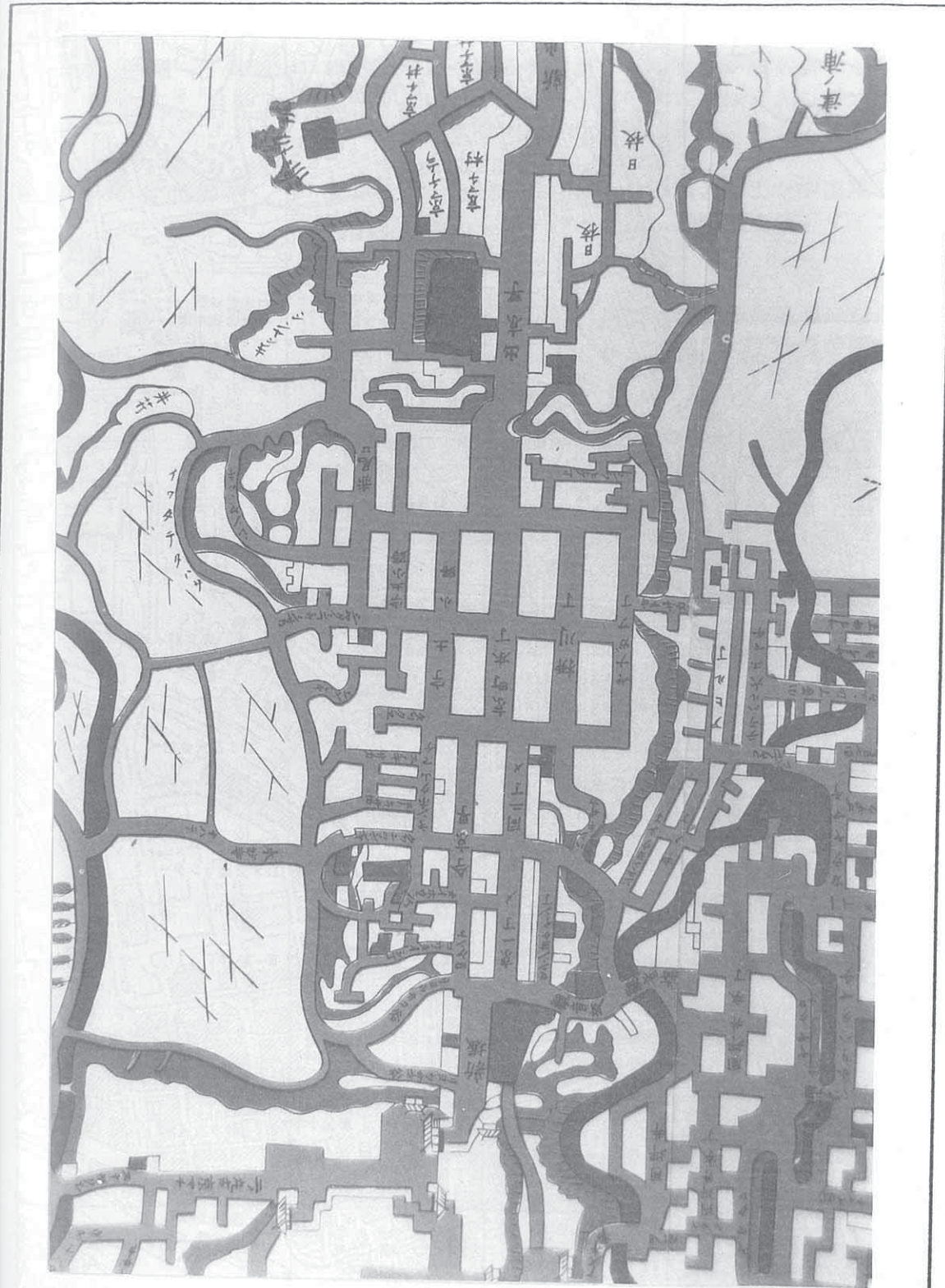
観音坂



西方寺の坂



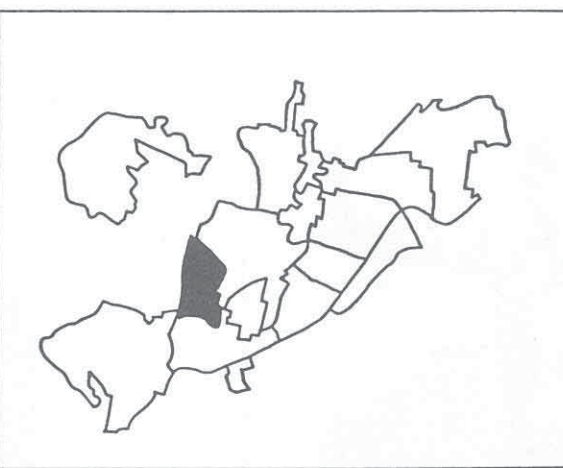
雁木坂



白川県肥後国熊本全図 (部分) —— (明治5~8年) ※坂名が多く記入されている
(所蔵: 熊本県立図書館・チM05A001)

(J) 新 町

地区のデータ	地区構成	新町1～4丁目
	旧地名及び呼称	一ノ勢屯 二ノ勢屯 松物屋町 蔚山町 堀端桶屋町 段山町 札ノ辻 新町1-2-3丁目 横町 上・中・下職人町 魚屋町 八百屋町 馬借町 新細工町 高麗門町 鳥屋町 塩屋町 裏小路 塩屋町裏小路 三丁目裏小路 正妙寺丁
	地区面積	38.6 ha
	地区人口	S50 6,057 人 S60 4,614 人
	地区人口密度	S60 109.3 人/ha
	用途地域	商業地域 38.6 ha (100%)



地区の歴史

町割りは古町の碁盤割とは違い短冊型である。街道は一直線ではなくクランクになっており、表通りは町家が並んでいた。裏通りには侍屋敷も存在したが後町人地となった。

新町は商工の町と同時に交通・通信の中心の場でもあった。新一丁目門の前に高札場があり札の辻と呼ばれ、肥後の四街道はここを起点としていた。また主な輸送経路は坪井川であり、高橋・百貫石から洗場（船場）橋まで船をさかのぼらせ船場町の朝市のもとをつくった。

明治になってから郵便役所が新町に置かれ、新しい商売である写真屋と活版印刷屋も始まった。また、熊本区役所が船場町に置かれそのころは新町は官公庁が置かれていた古城と一体になり、交通・通信はもとより政治・経済の中心でもあった。

この地域は昭和20年の空襲による被害が少なかったので昔ながらの家のたたずまいや町の仕事の中に昔の新町をしのぶことができる。旧藩時代、職人町と言われた場所で今なお菓子製造業が多い。

名 称	概 要
1 吉田松花堂	毒消丸で知られる薬問屋で、町家ながらも幕末から明治初期にかけての武家屋敷の様式を採り入れている。玄関上の屋根看板が、伝統を物語っている。
2 長崎次郎書店	大正末期の建物で、和風とも洋風ともまた中国風ともつかぬ特徴あるファサードは、保岡勝也のデザインである。
3 高麗門跡	慶長3年に清正が朝鮮出兵後、朝鮮の高麗門にならって建てたと伝えられている。高瀬の大工棟梁善蔵の作と伝えられる。
4 明治天皇 行在所跡	明治5年、天皇行幸の際の行在所跡。元藩の御客屋で廃藩後ここに会輔堂という学校を設けた。
5 福 一 堂	慶応元年創業以来の文旦漬けが有名である。箱づめを和紙の風呂敷で包んでくれる。
6 喜 楽	料亭としては明治20年の創業で、現在で3代目である。その前には細川家ともゆかりの場所であり、控えの間も含めて12帖の書院造の部屋が残っている。屏風・掛軸・器等も伝わっている。
7 政 木 屋	そば屋の創業は明治6年で今は4代目である。旧藩時代は紺屋であった。黒いそばが肥後そばの特徴だそうである。
8 富重写真館	明治2年富重利平氏による熊本初の写真館である。今も珍しい写真と写真機が保存されている。富重利平氏は長崎で写真技術を学んだ先駆的存在である。
9 ばんざい万十	小さな店ではあるが、新町名物の万十屋で、鮎の姿をした「若鮎」は人気があり午前中で売り切れてしまう。
10 船 場 橋	「あんたがたどこさ、肥後さ・・・」の手鞠唄で知られる。欄干には、コンクリート製のエビとタヌキが飾られている。
11 文 林 堂	レリーフが施された妻面と、腰折れ屋根が特徴である。大正期から昭和期にかけての建築特有の雰囲気を持つ。

名 称	概 要
12 丸 広 製 菓	手づくりのせんべい屋で、店先のガラスケースは下町らしい雰囲気をもつ。
13 森からし蓮根	熊本名物のからし蓮根を製造販売している。当時は細川藩のお殿様しか食べられなかったからし蓮根も、今は庶民の味となっている。
14 <small>むなかたや</small> 宗 像 家 本 舗	朝鮮飴を作って90余年になるが、昭和初期に最新技術を取り入れて、包装にも工夫をこらしている。
15 森 本 茶 舗	明治時代から4代にわたり“のれんの香”を守っている。
16 民家の間を すりぬける市電	市電が民家の裏の間を斜めにすり抜けて走る様子は一瞬タイムスリップして、なつかしい思いがする。
17 正 妙 寺 通 り	正妙寺のある通りで下町の雰囲気を十分に残しており、両側に植えられたアオギリの並木は、夏には木陰をつくってくれる。
18 兵 庫 屋	100余年の伝統的な手造りによる味噌、しょうゆは独自のまろやかさとコクがある。
19 八木邸・新町 獅子保存会	9月11日の藤崎宮大祭は新町獅子の飾卸から諸行事が始まる。新町獅子舞の特徴は歌舞伎調の優雅な中でも豪華な格調高い舞技で珍しい神事芸能とされている。
20 電 信 丁	町名の由来は明治8年札の辻に熊本電信局が設けられたことによる。明治23年に郵便・電信業務は統合されて熊本郵便電信局となり船場橋際に移った。
21 料亭新茶家	明治からの創業で、建物は昭和の大空襲で焼け建てなおした。庭は水前寺公園を小さくまねてつくられたものである。
22 白 石 製 菓	旧中職人町で昔ながらの餅菓子・寒菊などを作り継いでいる。黒砂糖をかけた「寒菊」は水俣地方の初盆や川尻神宮の祭には欠かせないものであった。

(K) 古 町

地区のデータ

地区構成 小沢町 細工町1～5丁目 魚屋町1～3丁目
板屋町 西唐人町 西阿弥陀寺町 川端町
古桶屋町 古大工町 紺屋町1～3丁目
横紺屋町 上鍛冶屋町 古川町 河原町
松原町 東唐人町 船場町1～3丁目
万町1・2丁目 紺屋阿弥陀寺町 鍛冶屋町
東阿弥陀寺町 呉服町1～3丁目 中唐人町
米屋町1・3丁目

旧地名及び呼称 小沢町 西・中唐人町 紺屋今町 紺屋横町
古鍛冶屋町 新鍛冶屋町 通丁 河原町
船場2・3丁目 細工1～5丁目 古桶屋町
呉服1～3丁目 米屋1～3丁目 慶徳堀
紺屋1～3丁目 魚屋1・2丁目 板屋町
萬1・2丁目 川端町 西・中・東阿弥陀寺町

地区面積 48.6 ha

地区人口 S50 4,562 人

S60 3,266 人

地区人口密度 S60 68.1 人/ha

用途地域 商業地域 48.6 ha (100%)



地区の歴史

加藤清正入国時、肥後国府のあった二本木付近から町人を移転させてつくった町である。町名は創建当時の職業に由来していたのであろう。この地域は城下町で唯一の町人地である。碁盤割としたその町割は、防備のためか中央に寺を置くという特徴のある町割をとっている。つまり、町の通りから狭い路地に入ると中は広大な敷地をもった寺院である。西南の井芹川・坪井川の合流点には特に寺院の密集地となっている。万一のときには寺院は兵士の宿舎となり、墓石は川をせきとめ城内に敵を入れさせないためであるという。旧藩時代は穀物・醤油・魚・野菜・茶・紙・葉・酒・髪結屋・呉服商等あらゆる物が揃っていた。明治になり西南の役では町のほとんど焼けてしまったが、復興は早く古町一帯はどっしりとした土蔵造りの卸問屋が軒をつらね経済の中心地となった。明治10年米屋町に第九銀行、明治17年熊本でのデパートの始まりである競商場等も建ち、大正14年の共進会開催に備えて唐人町筋は、木煉瓦舗装の歩道とモダンな街灯を設置してますます賑わいを増したのである。昭和20年の戦火にも免れて建物も形態もそのまま引き継がれた。しかし、戦後の流通経路の変化や、経済の動き、交通の流れの変化等により、新しい形での発展を見せている下通り、新市街にはとり残されたという感じもある。今は建物用途の変換が激しく、マンション化の傾向が著しい。

名 称	概 要
1 中央信用金庫 熊 本 支 店	大正8年第一銀行熊本支店として建てられた。初期の鉄筋コンクリート造りである。自由な雰囲気があふれ、外壁もあまり装飾がなく、さっぱりとしている。
2 森本表具店	明治19年築造で店框・揚げ縁・通り庭のある典型的な町家の伝統を残す。 <small>みせがまち あ えん</small>
3 本家慶徳万十 元祖慶徳堀万十	市電通りに元祖と本家が二軒並んでいる。江戸末期からの創業で、甘酒万十だけの店である。
4 大石そば屋	町家造りのそば屋で創業は古く建物は昭和7年のものである。京都の町家のように間に坪庭があり表（店）と裏（便所）とをつないでいる。
5 三角古美術店 （ 真 源 ）	両替商であった建物をそのままに、現在は古美術を展示販売した喫茶店となっている。
6 八 本 家	明治になり両替屋からラシャ商に転業。典型的な町家造りである。
7 長 六 橋	慶長6年清正により造られたという。白川に架けられた最初の橋で城下町への出入口として重要であった。
8 明 八 橋	種山石工橋本勘五郎の眼鏡橋で、明八橋は明治8年・明十橋は明治10年に造られた。
9 明 十 橋	
10 松 陽 軒	明治43年創業で、らくがんのなかに紫蘇と小豆あんを包んだ「肥後しおがま」が名物である。
11 惣 社 神 社	藩政時代には安楽寺の境内にあった。乱暴御免の搦鉢舞 <small>すりばち</small> いは明治30年頃までは行っていたが、今は実態を知っている人は少ない。
12 旧 中 村 小 児 科 医 院	大正初めに建てられた洋館で、奥の診察室の天井は鉄板に模様が打ち出されたものであり、スズランの花の形をしたシャンデリアが下がっている。今は、小原流教場の看板が掛かっている。

名 称	概 要
13 天 満 宮	松田バナナ店前の人家にはさまれた狭い路地を入ったところにあり、通りからは目立たない。昭和39年に再建されたものである。風神大根や前夜祭など風習が今なお残っている。
14 阿 弥 陀 寺	古い寺で奈良時代元万日山にあったのを清正が白川の辺（今の阿弥陀寺町）に移したが洪水のため現地に移る。阿蘇推光・飯田覚兵衛の墓がある。
15 末 広 座 跡	江戸時代から続いていた下河原の芝居小屋に代わるものとして、明治19年竣工され東雲座とともに二大定席であった。改築して旭座と名を改めた。市電開通のため新市街に移転した。
16 東 雲 座 跡	明治21年竣工し、その後改築して東雲劇場となる。
17 唐 人 町 筋	商業を営む唐人（中国人）が住んでいたことに由来するという。大正末には、木煉瓦の歩道とスズラン灯の街路で商業の中心地であった。
18 羅 漢 小 路 <small>らかんしゅうじ</small>	字名が残っている。旧藩時代この道の阿弥陀寺側に石の羅漢さんが数十体も並んでいたのがこの名が付いたという。現在は一体もない。
19 一 画 一 寺	都市計画的手法による町割である。一辺約 120m四方の碁盤目割の街区で整備されており、各街区の中央は寺院が設置されている。
20 船 場 町	古くは湿地であり清正は坪井川をつけ替える際ここを利用し水路とし、兩岸に船着場を設け物資が運ばれた。名はこれに由来する。
21 下 河 原 公 園 跡	旧藩時代、河原には刑場があり上座・下座の芝居小屋があった。
22 慶 徳 小 学 校	熊本市で最初の鉄筋コンクリート造の小学校で、3階建のコの字形の対象な平面をもつ。柱形上部や、そのほかの要所に装飾やレリーフをあしらっている。